

一般国道42号新宮紀宝道路建設事業

鶴殿西遺跡（第1～5・7～10次）  
発掘調査報告

～三重県南牟婁郡紀宝町～

2025（令和7）年3月

三重県埋蔵文化財センター



# 例　言

- 1 本書は、三重県南牟婁郡紀宝町鵜殿に所在する鵜殿西遺跡（第1～5・7～10次）の発掘調査報告書である。
- 2 本書にかかる発掘調査の調査原因は、一般国道42号新宮紀宝道路建設事業である。
- 3 発掘調査にかかる費用は、国土交通省近畿地方整備局紀南河川事務所が負担した。
- 4 発掘調査は下記の体制で実施した。

委託者　　国土交通省近畿地方整備局紀南河川事務所

受託者　　三重県教育委員会

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

※年度ごとの調査の体制は、第I章を参照。

- 5 出土遺物の整理および報告書作成は、平成30年度～令和6年度に行った。

- 6 本書の執筆は、以下のとおりである。文責は文末に表記した。

第I章　角正芳浩　渡辺和仁　若井啓獎　　第II章　角正芳浩　渡辺和仁

第III章　渡辺和仁　鐸木厚太　小濱　学　　第IV章　渡辺和仁

第V章　渡辺和仁　日鉄テクノロジー株式会社九州事業所　鈴木瑞穂

一般社団法人文化財科学研究センター　金原正子・金原美奈子・木寺きみ子

第VI章　渡辺和仁

本書の図版作成及び遺物写真撮影は、以下のとおりである。

石井智大　角正芳浩　小濱　学　新名　強　鐸木厚太　田中久生　中野　環

宮崎浩伸　村田雄紀　若井啓獎　渡辺和仁（50音順）

なお、全体の編集は渡辺の協力を得て小濱が行った。

- 7 発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の個人及び関係機関にご指導とご協力を賜った。

石丸　彩、伊勢中世史研究会、大串享平、北野隆亮、紀宝町、紀宝町教育委員会、

小林高太、御坊市教育委員会、佐藤亜聖、新宮市教育委員会、自治会鵜殿区、竹鼻　康、辰巳　尚、

田中元浩、津村善博、仲辻慧大、藤澤良祐、前田和彦、みなべ町教育委員会、

森倉賢一郎、和歌山県教育委員会（以上、敬称略・50音順）

- 8 本書が扱う発掘調査の記録および出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。ご活用願いたい。

## 凡 例

- 1 本書では、国土地理院発行の1:25,000 数値地形図「阿田和」「大里」「新宮」、2017三重県共有デジタル地図の1:2,500 数値地形図を用いた。なお、三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て使用している（令和6年4月16日付け、三総合地第2号）。
- 2 本書で用いた座標は、すべて世界測地系による第VI座標系に基づき、方位は全て座標化を用いている。
- 3 本書で示す方位は、すべて座標化を用いている。
- 4 本書で用いる遺構略号は以下のとおりである。

S B : 掘立柱建物 S A : 柱列 S E : 井戸 S K : 土坑（大穴） S D : 溝 Pit : 柱穴（小穴）  
S Z : その他性格不明遺構
- 5 土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（1967年初版）日本色研事業株式会社に拠る。
- 6 土色注記の凡例は、以下のとおりである。
  - ・含有量 僅かに混じる（含む）：5%以下、少し混じる（含む）：6～10%、  
やや混じる（含む）：10～30%、多く混じる（含む）：30%以上
- 7 訳は各章の文末に付し、参考文献も訳に記した。
- 8 遺物実測図の縮尺は基本的に1/4とし、一部の小型・大型の遺物については縮尺を変えている。各遺物の縮尺は、図中スケール及び図版キャプションにて明示している。
- 9 図版内、図版及び写真図版キャプションにおける遺構番号の表記については、報告遺構番号に続いて括弧付きで調査時遺構番号を併記した。
- 10 遺構一覧表は第III章、遺物観察表は第IV章の各章末に付した。
- 11 遺構一覧表の凡例は、以下のとおりである。
  - ・報告遺構番号は、調査次数ごとで付与された調査時遺構番号を整理したものである。異なる複数の調査次数に跨る同一の遺構については、最初の調査次数で付与された番号に統一した（ただし、第2次調査の遺構番号は千の位から万の位へ修正を行っている）。なお、調査時に遺構番号が付与されたものの、調査後の検討で遺構ではないと判断されたものについては欠番としている。
  - ・調査時遺構番号は、調査次数ごとに付与した番号である（詳細は、第I章第5節・第III章参照）。
- 12 遺物観察表の凡例は、以下のとおりである。
  - ・報告遺物番号は、遺物図版及び写真図版中の各遺物の番号と対応する。
  - ・実測番号は、実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。
  - ・報告遺構名は、遺構一覧表における報告遺構番号と対応し、調査時遺構名は各次数の調査ごとに付与した番号である。
  - ・土器及び陶磁器類の残存度は、円周を12分割したうちの残存度を記し（例：口縁部3/12）、1/12以下のものは部位を明記した上で「小片」とした。
  - ・土器及び陶磁器類以外の残存度については、どのぐらいが遺存しているのかの目安として「完存」「半欠」「一部欠」などの表現で示した。
  - ・法量は、各部位の完存ないし復元の値である。底部と体部の境が明確でない皿や鍋等の底径は記していない。また、器高については、口縁部から底部まで完存ないし復元できたもののみ記している。
  - ・色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（1967年初版）日本色研事業株式会社に拠る。
  - ・色調は、外面を代表して記し、色調に差がある場合は2色を併記した。なお、施釉されている陶磁器類については釉色を記したが、磁器に施された透明釉については記載していない。
- 13 写真図版中の写真は、すべて縮尺不同である。

# 本文目次

<b>第Ⅰ章 前言</b>	· · · · ·	1
第1節 事業の概要	· · · · ·	1
第2節 調査に至る経緯	· · · · ·	1
第3節 調査の体制	· · · · ·	3
第4節 文化財保護法にかかる諸手続き	· · · · ·	4
第5節 調査の方法	· · · · ·	5
第6節 調査の経過	· · · · ·	8
第7節 普及公開活動	· · · · ·	10
<b>第Ⅱ章 位置と環境</b>	· · · · ·	13
第1節 地理的環境	· · · · ·	13
第2節 歴史的環境	· · · · ·	13
<b>第Ⅲ章 遺構</b>	· · · · ·	17
第1節 基本層序	· · · · ·	17
第2節 検出された遺構	· · · · ·	17
第3節 掘立柱建物・柱列	· · · · ·	17
第4節 土坑・井戸	· · · · ·	77
第5節 溝	· · · · ·	102
第6節 その他の遺構	· · · · ·	116
<b>第Ⅳ章 遺物</b>	· · · · ·	125
第1節 出土した遺物	· · · · ·	125
第2節 掘立柱建物・柱列出土遺物	· · · · ·	126
第3節 土坑・井戸出土遺物	· · · · ·	129
第4節 溝出土遺物	· · · · ·	167
第5節 その他遺構出土遺物	· · · · ·	212
第6節 表土・包含層等出土遺物	· · · · ·	218
<b>第Ⅴ章 自然科学分析</b>	· · · · ·	275
第1節 分析の目的	· · · · ·	275
第2節 鶴殿西遺跡出土鉄滓の調査	· · · · ·	276
第3節 鶴殿西遺跡（第3・4・5次）出土遺物の調査	· · · · ·	284
第4節 令和5年度一般国道42号新宮紀宝道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（鶴殿西遺跡）にかかる自然科学分析業務委託	· · · · ·	293
<b>第VI章 結語</b>	· · · · ·	305
第1節 遺跡の形成と古環境	· · · · ·	305
第2節 鶴殿西遺跡の遺構と変遷	· · · · ·	305
第3節 鶴殿西遺跡における遺物の様相	· · · · ·	308
第4節 総括	· · · · ·	311

# 図版目次

第Ⅰ章			
第Ⅰ-1図 一般国道42号新宮紀宝道路計画路線及び鵜殿西遺跡	1	穴土層断面図	45
第Ⅰ-2図 早馬遺跡・鵜殿遺跡・鵜殿西遺跡	2	第Ⅲ-29図 S B 37008 平面図	46
第Ⅰ-3図 調査区配置図	6	第Ⅲ-30図 S B 37008 断面図	47
第Ⅰ-4図 大地区割	7	第Ⅲ-31図 S B 37010 平面図・断面図	48
第Ⅱ章		第Ⅲ-32図 S B 37013, 37014 平面図・断面図	49
第Ⅱ-1図 事業地位置図	13	第Ⅲ-33図 S B 37015, 37017、S A 37021 平面図・断面図	51
第Ⅱ-2図 鵜殿西遺跡及び周辺遺跡位置図	16	第Ⅲ-34図 S B 37016, S A 37018 平面図・断面図	52
第Ⅲ章		第Ⅲ-35図 S B 37019, 37020、S A 37022, 37023, 37024 平面図・断面図	53
第Ⅲ-1図 調査区東壁土層断面図1	18	第Ⅲ-36図 S B 42013 平面図・断面図	54
第Ⅲ-2図 調査区東壁土層断面図2	19	第Ⅲ-37図 S B 44048, 44049 平面図・断面図	55
第Ⅲ-3図 調査区南壁土層断面図1	20	第Ⅲ-38図 S B 44050, 44051 平面図・断面図	56
第Ⅲ-4図 調査区南壁土層断面図2	21	第Ⅲ-39図 S B 44052, 44053, 44054, 44055 平面図・断面図	57
第Ⅲ-5図 遺構平面図分割状況	22	第Ⅲ-40図 S A 80019、S B 10025 平面図・断面図	58
第Ⅲ-6図 遺構平面図A	23	第Ⅲ-41図 S A 80019、S B 10025 柱穴土層図	59
第Ⅲ-7図 遺構平面図B	24	第Ⅲ-42図 S B 80021 平面図・断面図・柱穴土層断面図	60
第Ⅲ-8図 遺構平面図C	25	第Ⅲ-43図 S B 80022 平面図・断面図	61
第Ⅲ-9図 遺構平面図D	26	第Ⅲ-44図 S B 80022 柱穴土層断面図	62
第Ⅲ-10図 遺構平面図E	27	第Ⅲ-45図 S B 80025 平面図・断面図	63
第Ⅲ-11図 遺構平面図F	28	第Ⅲ-46図 S B 80025 柱穴土層断面図	64
第Ⅲ-12図 遺構平面図G	29	第Ⅲ-47図 S B 80026 平面図・断面図	65
第Ⅲ-13図 遺構平面図H	30	第Ⅲ-48図 S B 80026 柱穴土層断面図	66
第Ⅲ-14図 遺構平面図I	31	第Ⅲ-49図 S B 10024, 10030 平面図・断面図・柱穴土層断面図	67
第Ⅲ-15図 遺構平面図J	32	第Ⅲ-50図 S B 10035 平面図・断面図・柱穴土層断面図	68
第Ⅲ-16図 遺構平面図K	33	第Ⅲ-51図 S K 20004, 20005, 20007、S E 20016 平面図・土層断面図	78
第Ⅲ-17図 遺構平面図L	34	第Ⅲ-52図 S K 20031 平面図・土層断面図	79
第Ⅲ-18図 S B 20011 平面図・断面図・柱穴土層断面図	35	第Ⅲ-53図 S K 31003, 31004, 31005, 31012 平面図・土層断面図	80
第Ⅲ-19図 S B 20030、S A 20044, 20045 平面図・断面図	36	第Ⅲ-54図 S K 31006, 31007、S E 31016 平面図・土層断面図	81
第Ⅲ-20図 S B 20030 断面図	37	第Ⅲ-55図 S K 33011, 34003、S E 33003, 33008, 33009 平面図・土層断面図	82
第Ⅲ-21図 S B 20030 柱穴土層断面図	38	第Ⅲ-56図 S K 34008、S E 35010, 36007, 37009 平面図・	
第Ⅲ-22図 S B 20039 平面図・断面図・柱穴土層断面図	39		
第Ⅲ-23図 S B 20043, 37001 平面図・断面図	40		
第Ⅲ-24図 S B 32007, 32009, 32010、S A 32008 平面図・断面図	41		
第Ⅲ-25図 S B 33014, 33015 平面図・断面図	42		
第Ⅲ-26図 S B 33016 平面図・断面図	43		
第Ⅲ-27図 S B 33017, 33021、S A 33022, 33023 平面図・断面図	44		
第Ⅲ-28図 S B 34007、S A 34011 平面図・断面図・柱			

土層断面図	84	第IV-7図	出土遺物実測図7	139
第III-57図 SK 41010, S E 42001, 42003, 42004 平面図・ 土層断面図	86	第IV-8図	出土遺物実測図8	140
第III-58図 SK 44001, 44002, 44006, 51016, 51018、SD 44015 平面図・土層断面図	88	第IV-9図	出土遺物実測図9	142
第III-59図 SK 51017, 51019 平面図・土層断面図	89	第IV-10図	出土遺物実測図10	144
第III-60図 SK 51023, 70002, 70013, 70019 平面図・土 層断面図	90	第IV-11図	出土遺物実測図11	146
第III-61図 SK 80002, 80003, 80004, 80005, 80012, 80018 平面図・土層断面図	93	第IV-12図	出土遺物実測図12	148
第III-62図 SK 80006, 80007, 80008, 80009, 80010 平面 図・土層断面図	95	第IV-13図	出土遺物実測図13	150
第III-63図 SK 80011、SE 80015 平面図・土層断面図	96	第IV-14図	出土遺物実測図14	152
第III-64図 SK 10002, 10005, 10006, 10007, 10008, 10010, 10021, 10022 平面図・土層断面図	97	第IV-15図	出土遺物実測図15	155
第III-65図 SK 10013, 10014, 10015, 10016, 10027, 10032, 10033, 10040, 10041 平面図・土層断面図	99	第IV-16図	出土遺物実測図16	157
第III-66図 SK 10042, 10045 平面図・土層断面図	100	第IV-17図	出土遺物実測図17	159
第III-67図 溝平面図1	103	第IV-18図	出土遺物実測図18	160
第III-68図 SD 31001, 31002, 31009, 31011, 32006, 44015 土層断面図	104	第IV-19図	出土遺物実測図19	162
第III-69図 溝平面図2	105	第IV-20図	出土遺物実測図20	164
第III-70図 SD 31002, 44015, 44030 土層断面図	106	第IV-21図	出土遺物実測図21	166
第III-71図 SD 32006 土層断面図	107	第IV-22図	出土遺物実測図22	168
第III-72図 溝平面図3、SD 31002, 43001 土層断面図	108	第IV-23図	出土遺物実測図23	170
第III-73図 SD 32004, 33004, 33006, 33012 土層断面図	109	第IV-24図	出土遺物実測図24	172
第III-74図 溝平面図4	110	第IV-25図	出土遺物実測図25	173
第III-75図 溝平面図5、SD 35003, 35007, 36003, 51024, 70007 土層断面図	112	第IV-26図	出土遺物実測図26	174
第III-76図 SD 35004 土層断面図	113	第IV-27図	出土遺物実測図27	176
第III-77図 溝平面図6、SD 20022, 20041, 51024, 52001, 52003 土層断面図	114	第IV-28図	出土遺物実測図28	177
第IV章		第IV-29図	出土遺物実測図29	180
第IV-1図 出土遺物実測図1	127	第IV-30図	出土遺物実測図30	181
第IV-2図 出土遺物実測図2	128	第IV-31図	出土遺物実測図31	184
第IV-3図 出土遺物実測図3	130	第IV-32図	出土遺物実測図32	185
第IV-4図 出土遺物実測図4	132	第IV-33図	出土遺物実測図33	187
第IV-5図 出土遺物実測図5	135	第IV-34図	出土遺物実測図34	188
第IV-6図 出土遺物実測図6	137	第IV-35図	出土遺物実測図35	190
		第IV-36図	出土遺物実測図36	191
		第IV-37図	出土遺物実測図37	192
		第IV-38図	出土遺物実測図38	194
		第IV-39図	出土遺物実測図39	195
		第IV-40図	出土遺物実測図40	197
		第IV-41図	出土遺物実測図41	199
		第IV-42図	出土遺物実測図42	200
		第IV-43図	出土遺物実測図43	201
		第IV-44図	出土遺物実測図44	203
		第IV-45図	出土遺物実測図45	205
		第IV-46図	出土遺物実測図46	208
		第IV-47図	出土遺物実測図47	209
		第IV-48図	出土遺物実測図48	210
		第IV-49図	出土遺物実測図49	211
		第IV-50図	出土遺物実測図50	213
		第IV-51図	出土遺物実測図51	215
		第IV-52図	出土遺物実測図52	218

第IV-53 図 出土遺物実測図 53	220
第IV-54 図 出土遺物実測図 54	221
第V章	
第V-1 図 梶形鍛冶津の顕微鏡組織・EPMA 調査 1	277
第V-2 図 梶形鍛冶津の顕微鏡組織・EPMA 調査 2	279
第V-3 図 梶形鍛冶津の顕微鏡組織・EPMA 調査 3	280
第V-4 図 梶形鍛冶津の顕微鏡組織・EPMA 調査 4	281
第V-5 図 鋳鉄付着木炭の顕微鏡組織・EPMA 調査 5	286
第V-6 図 梶形鍛冶津の顕微鏡組織・EPMA 調査 6	287
第V-7 図 梶形鍛冶津の顕微鏡組織・EPMA 調査 7	289
第V-8 図 梶形鍛冶津の顕微鏡組織・EPMA 調査 8	290
第V-9 図 粘度組成図	296
第V-10 図 主要珪藻ダイアグラム	297
第V-11 図 堆積物性状図	298
第V-12 図 珪藻写真	302
第VI章	
第VI-1 図 遺跡の立地と周辺の環境	306
第VI-2 図 遺構概略図	307

## 表目次

第I章	
第I-1 表 一般国道 42 号新宮紀宝道路事業に伴う鶴殿西遺跡発掘調査一覧	11
第II章	
第II-1 表 掘立柱建物詳細情報 1	70
第II-2 表 掘立柱建物詳細情報 2	71
第II-3 表 掘立柱建物詳細情報 3	72
第II-4 表 掘立柱建物詳細情報 4	73
第II-5 表 掘立柱建物詳細情報 5	74
第II-6 表 掘立柱建物詳細情報 6	75
第II-7 表 掘立柱建物詳細情報 7	76
第II-8 表 遺構一覧表 1	116
第II-9 表 遺構一覧表 2	117
第II-10 表 遺構一覧表 3	118
第II-11 表 遺構一覧表 4	119
第II-12 表 遺構一覧表 5	120
第II-13 表 遺構一覧表 6	121
第II-14 表 遺構一覧表 7	122
第II-15 表 遺構一覧表 8	123
第II-16 表 遺構一覧表 9	124
第IV章	
第IV-1 表 遺物観察表 1	223
第IV-2 表 遺物観察表 2	224
第IV-3 表 遺物観察表 3	225
第IV-4 表 遺物観察表 4	226
第IV-5 表 遺物観察表 5	227
第IV-6 表 遺物観察表 6	228
第IV-7 表 遺物観察表 7	229
第IV-8 表 遺物観察表 8	230
第IV-9 表 遺物観察表 9	231
第IV-10 表 遺物観察表 10	232
第IV-11 表 遺物観察表 11	233
第IV-12 表 遺物観察表 12	234
第IV-13 表 遺物観察表 13	235
第IV-14 表 遺物観察表 14	236
第IV-15 表 遺物観察表 15	237
第IV-16 表 遺物観察表 16	238
第IV-17 表 遺物観察表 17	239
第IV-18 表 遺物観察表 18	240
第IV-19 表 遺物観察表 19	241
第IV-20 表 遺物観察表 20	242
第IV-21 表 遺物観察表 21	243
第IV-22 表 遺物観察表 22	244
第IV-23 表 遺物観察表 23	245
第IV-24 表 遺物観察表 24	246
第IV-25 表 遺物観察表 25	247
第IV-26 表 遺物観察表 26	248
第IV-27 表 遺物観察表 27	249
第IV-28 表 遺物観察表 28	250
第IV-29 表 遺物観察表 29	251
第IV-30 表 遺物観察表 30	252
第IV-31 表 遺物観察表 31	253
第IV-32 表 遺物観察表 32	254
第IV-33 表 遺物観察表 33	255
第IV-34 表 遺物観察表 34	256
第IV-35 表 遺物観察表 35	257
第IV-36 表 遺物観察表 36	258
第IV-37 表 遺物観察表 37	259
第IV-38 表 遺物観察表 38	260
第IV-39 表 遺物観察表 39	261

第IV-40表 遺物観察表40	262
第IV-41表 遺物観察表41	263
第IV-42表 遺物観察表42	264
第IV-43表 遺物観察表43	265
第IV-44表 遺物観察表44	266
第IV-45表 遺物観察表45	267
第IV-46表 遺物観察表46	268
第IV-47表 遺物観察表47	269
第IV-48表 遺物観察表48	270
第IV-49表 遺物観察表49	271
第IV-50表 遺物観察表50	272
第IV-51表 遺物観察表51	273
第IV-52表 遺物観察表52	274
第V章	
第IV-1表 供試材の履歴と調査項目1	282
第IV-2表 供試材の化学組成1	282
第IV-3表 供試材の履歴と調査項目2	291
第IV-4表 供試材の化学組成2	291
第IV-5表 分析試料一覧	294
第IV-6表 粘度組成分析結果	299
第IV-7表 珪藻分析結果	301

## 写真図版目次

写真1 現地説明会（第2次調査）	12
写真2 地元小学校を対象とした遺跡見学会	12
写真図版1 遠景、御船島上空より 遠景、熊野川河口より	313
写真図版2 第2次調査前状況 第2次SB 20011	314
写真図版3 第2次SB 20011, 20030, 20039 第2次SB 20030	315
写真図版4 第2次SB 20039 第2次SK 20002	316
写真図版5 第2次SK 20003 第2次SK 20004	317
写真図版6 第2次SK 20005 第2次SK 20007	318
写真図版7 第2次SK 20029 第2次SK 20031	319
写真図版8 第2次SD 20022 北側 第2次L-E14地区 Pit23	320
写真図版9 第2次L-G15地区 Pit1 第2次遺構掘削状況	321
写真図版10 第2次下層確認状況 第3次SB 34007	322
写真図版11 第3次SB 34007Pit13断割状況 第3次SE 31005 土層断面	323
写真図版12 第3次SE 31007 検出状況 第3次SE 31007 土層断面	324
写真図版13 第3次SE 31007 第3次SE 33008 出土状況	325
写真図版14 第3次SE 36007 土層断面	
第3次SK 34008	326
写真図版15 第3次SD 35004(SD 36002) 土層断面	
第3次SD 35004(36002)	327

写真図版16 第3次SD 35004(36002)	
第3次SD 35007(36008)	328
写真図版17 第3次SD 35007(36008) 土層断面	
第3次調査区6区全景	329
写真図版18 第4次調査区周辺状況 第4次SK 41002 土層断面	330
写真図版19 第4次SK 41010 掘削状況 第4次SK 41010 遺物出土状況	331
写真図版20 第4次SE 42001 断割状況 第4次SE 42003 断割状況	332
写真図版21 第4次SE 42004 断割状況 第4次SK 42005	333
写真図版22 第4次SE 44006 土層断面 第4次SK 44027	334
写真図版23 第4次SK 44028 第4次SD 43001	335
写真図版24 第4次SD 43001 第4次SD 43001 遺物出土状況	336
写真図版25 第4次SD 43001 土層断面 第4次調査区4区南側全景	337
写真図版26 第4次調査区南半全景 第5次SK 51006	338
写真図版27 第5次SK 51010 第5次SK 51014	339
写真図版28 第5次SK 51017 遺物出土状況 第5次SK 51017 遺物出土状況	340
写真図版29 第5次SK 51019 第5次SK 51019 遺物出土状況	341
写真図版30 第5次SK 51023 掘削状況 第5次SK 51023 土層断面	342
写真図版31 第5次SD 35004(51001)	
第5次SD 51024(52002), 52001	343

写真図版 32 第 5 次 S D 52001 遺物出土状況 第 5 次調査区 1 区全景	344
写真図版 33 第 5 次調査区 2 区南全景 第 5 次調査区 2 区南全景	345
写真図版 34 第 5 次調査区 2 区北全景 第 5 次調査区 3 区西側全景	346
写真図版 35 第 7 次 S D 44015(70010, 70016) 第 7 次 S D 44015(70010) 底部付近	347
写真図版 36 第 7 次 S D 44015(70010) 第 7 次調査区 1 区全景	348
写真図版 37 第 7 次調査区 2 区中央全景 第 7 次調査区 2 区南全景	349
写真図版 38 第 7 次調査区 2 区北全景 第 8 次 S B 80021	350
写真図版 39 第 8 次 S K 80008 第 8 次 S D 36009(80001)	351
写真図版 40 第 8 次調査区全体俯瞰 第 8 次調査区西側北俯瞰	352
写真図版 41 第 8 次調査区西側南俯瞰 第 8 次調査区北半俯瞰	353
写真図版 42 第 8 次調査区と周辺状況 第 8 次調査区全景	354
写真図版 43 第 9 次 S D 32006(90001) 掘削状況 第 9 次調査区全景	355
写真図版 44 第 10 次 S B 10024 第 10 次 S B 10024J-W12 地区 Pit13 断割状況	356
写真図版 45 第 10 次 S B 10025 第 10 次 S B 10025J-W13 地区 Pit 6 断割状況	357
写真図版 46 第 10 次 S B 10030J-X12 地区 Pit12 断割状況 第 10 次 S B 80026(10036) L-A12 地区 Pit20 断割状況	358
写真図版 47 第 10 次 S B 80026(10036) L-B12 地区 Pit 4 断割状況 第 10 次 S B 80025(10044) L-A12 地区 Pit 7 断割状況	359
写真図版 48 第 10 次 S K 10004 土層断面 第 10 次 S K 51013(10009)	360
写真図版 49 第 10 次 S K 10014, 10015 土層断面 第 10 次 S K 10021 土層断面	361
写真図版 50 第 10 次 S K 80009(10029) 第 10 次 S K 80009(10029) 土層断面	362
写真図版 51 第 10 次 S K 10040 土層断面 第 10 次 S K 10041	363
写真図版 52 第 10 次 S K 10041 土層断面 第 10 次 S K 10042 土層断面	364
写真図版 53 第 10 次 S K 10045 土層断面 第 10 次 S D 32006(10001)	365
写真図版 54 第 10 次 S D 32006(10001) 第 10 次 S D 32006(10001) 土層断面	366
写真図版 55 第 10 次 S D 44015(10023) 第 10 次 S D 44015(10023) 土層断面	367
写真図版 56 第 10 次調査区南半 第 10 次調査区遠景	368
写真図版 57 出土遺物 1	369
写真図版 58 出土遺物 2	370
写真図版 59 出土遺物 3	371
写真図版 60 出土遺物 4	372
写真図版 61 出土遺物 5	373
写真図版 62 出土遺物 6	374
写真図版 63 出土遺物 7	375
写真図版 64 出土遺物 8	376
写真図版 65 出土遺物 9	377
写真図版 66 出土遺物 10	378
写真図版 67 出土遺物 11	379
写真図版 68 出土遺物 12	380
写真図版 69 出土遺物 13	381
写真図版 70 出土遺物 14	382
写真図版 71 出土遺物 15	383
写真図版 72 出土遺物 16	384
写真図版 73 出土遺物 17	385
写真図版 74 出土遺物 18	386
写真図版 75 出土遺物 19	387
写真図版 76 出土遺物 20	388
写真図版 77 出土遺物 21	389
写真図版 78 出土遺物 22	390
写真図版 79 出土遺物 23	391

# 第Ⅰ章 前 言

## 第1節 事業の概要

一般国道42号新宮紀宝道路（仮称：紀宝IC～新宮北IC）は、三重県南牟婁郡紀宝町神内から和歌山県新宮市あけぼのに至る延長2.4kmの自動車専用道路である（第I-1図）。

この道路は、当地域における輸送時間の短縮、緊急医療活動の支援、渋滞緩和による地域相互の振興と発展に寄与するほか、台風等による土砂災害や南海トラフ地震等の地震災害時におけるネットワーク

を構築し、救命活動や地域振興支援に寄与することなどを主な目的としている<sup>(1)</sup>。

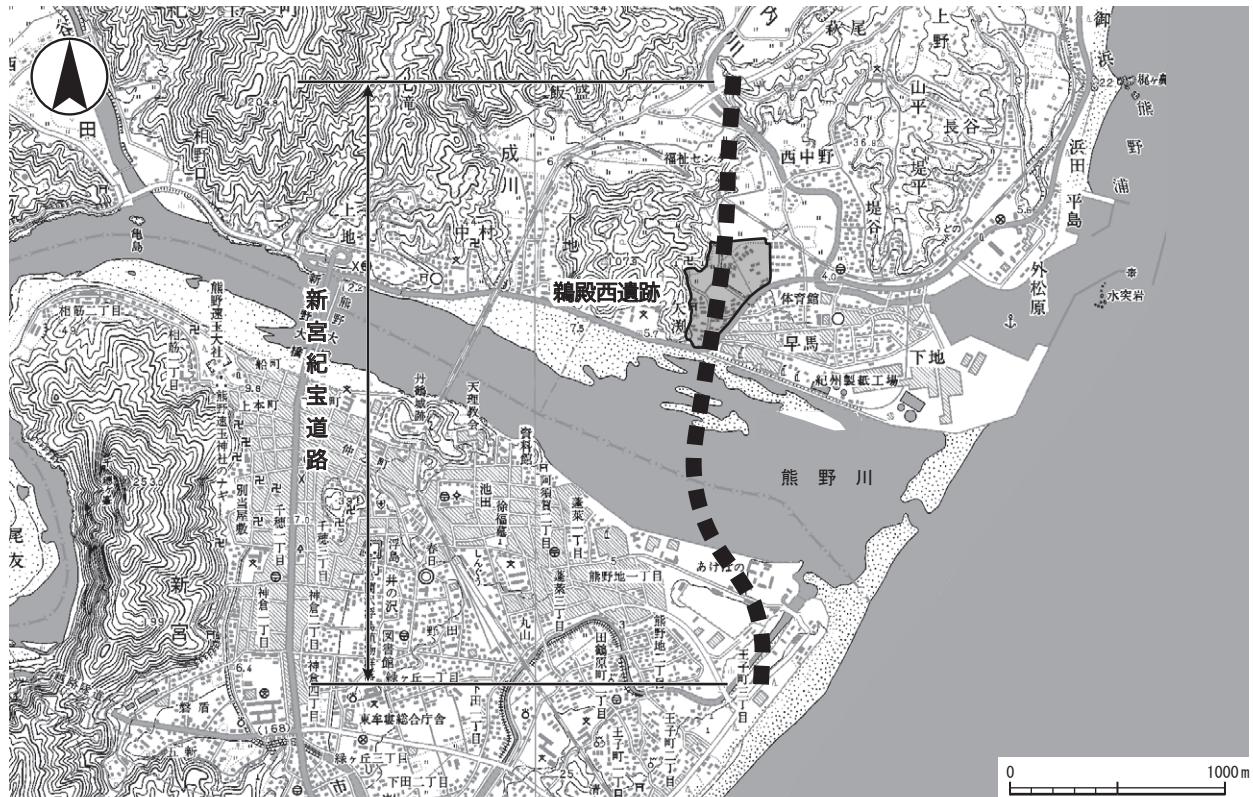
平成25年5月に「一般国道42号新宮紀宝道路」として、三重県南牟婁郡紀宝町神内から和歌山県新宮市あけぼのの区間が事業化され、平成28年度に用地取得、平成29年度に工事が着手された。供用開始は令和6年12月となった。

## 第2節 調査に至る経緯

平成26年度 平成25年5月の一般国道42号新宮紀宝道路（以下、「新宮紀宝道路」）の事業化に伴い「平成27年度以降の各種公共事業等の計画について」（平成27年2月16日付け事務連絡）にて、三重県教育委員会社会教育・文化財保護課（以下、「社会教育・文化財保護課」）から三重県埋蔵文化財センター（以下、「埋蔵文化財センター」）に対して埋

蔵文化財の有無確認の依頼がなされた。

これを受けて埋蔵文化財センターは、平成27年2月に職員による現地確認を行うとともに「平成27年度以降国等による各種公共事業等事業地内埋蔵文化財の有無について」（平成27年3月6日付け教理第465号）にて、関係市町教育委員会に対して埋蔵文化財の有無について照会を行った。その結果、



第I-1図 一般国道42号新宮紀宝道路計画路線及び鵜殿西遺跡（1:35,000）

紀宝町において、事業地内の水田に土器の散布がみられること、周知の埋蔵文化財包蔵地である「鵜殿遺跡」と「早馬遺跡」の間に形成された自然堤防上にも埋蔵文化財包蔵地が広がっている可能性が高いこと、事業地に周知の埋蔵文化財包蔵地である「中野遺跡」の一部が含まれている可能性があることを確認した。

埋蔵文化財センターでは、これらの成果をもとに平成27年3月16日に紀宝町教育委員会と新たな埋蔵文化財包蔵地の発見について協議を行い、早馬遺跡及び鵜殿遺跡と新たに確認した埋蔵文化財包蔵地を一つに統合し「鵜殿西遺跡」と改称したうえで、紀宝町教育委員会が「新たな埋蔵文化財包蔵地の把握について」（平成27年3月24日付け紀教生第40号）を三重県教育委員会へ通知した。三重県教育委員会は周知の埋蔵文化財として認定し（平成27年3月26日付け教委第12-4241号「遺跡の発見について」）、埋蔵文化財センター及び紀宝町教育委員会に通知した。

これを受けて、埋蔵文化財センターは「平成27年度以降国等による各種公共事業等事業地内埋蔵文化財の有無について」（平成27年3月27日付け教埋第500号）にて、社会教育・文化財保護課を通



第I-2図 早馬遺跡・鵜殿遺跡・鵜殿西遺跡 (1:6,000)

じて国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所（以下、「紀南河川国道事務所」）に対し、事業地内に鵜殿西遺跡と中野遺跡が含まれており、これらの埋蔵文化財の保護について協議が必要であると回答した。

平成28年度 新宮紀宝道路の事業地内に存在する埋蔵文化財の保護について、平成28年5月23日および同年12月19日に紀南河川国道事務所、三重県県土整備部道路企画課（以下、「県土整備部道路企画課」）、社会教育・文化財保護課、埋蔵文化財センターで協議を行った。

協議の結果、鵜殿西遺跡は事業地内の相当な面積がかかることから、現状保存が困難な場合は記録保存のための発掘調査が必要になると、中野遺跡については埋蔵文化財センターが現地確認調査を実施することを確認した。

平成29年度 新宮紀宝道路の事業地内に存在する周知の埋蔵文化財の保護について、平成29年6月1日に紀南河川国道事務所、県土整備部道路企画課、社会教育・文化財保護課、埋蔵文化財センターで協議を行った。

協議の結果、中野遺跡については事業地内にかかる約100m<sup>2</sup>を対象に埋蔵文化財センターが現地確認調査を実施することになった。鵜殿西遺跡については、事業地内で現状保存が困難な箇所について記録保存のための発掘調査を行うことを改めて確認した。この間、埋蔵文化財センターでは鵜殿西遺跡の範囲について再検討する詳細な現地確認調査を実施した。その結果、周知の範囲のうち北端部については埋蔵文化財が存在しないと判断し、範囲を変更する手続きを行い、三重県教育委員会及び紀宝町教育委員会へ通知した（平成29年7月21日付け教埋第135号「周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更について」）。

また、中野遺跡については埋蔵文化財センターが平成29年6月27日に現地確認を行い、埋蔵文化財包蔵地の範囲が事業地外であることを確認し、紀南河川国道事務所及び紀宝町教育委員会に伝達した。同年9月21日に紀南河川国道事務所、県土整備部道路企画課、社会教育・文化財保護課、埋蔵文化財センターで事業地内の埋蔵文化財の取り扱いに関する

る協議を行い、鵜殿西遺跡については現状保存が困難な 36,480 m<sup>2</sup>を対象に事前の発掘調査を実施して記録保存を図ることが確認された。

これらの協議を受けて、紀南河川国道事務所から「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（平成 29 年 12 月 6 日付け国近整紀三工第 244 号）が三重県教育委員会あてに提出された。

その後、平成 30 年 2 月 6 日に紀南河川国道事務所、県土整備部道路企画課、社会教育・文化財保護課、埋蔵文化財センターで記録保存のための発掘調査を実施する工程についての協議を行い、発掘調査は平成 30 年度から実施することが確認された。

その後も円滑な事業の推進のため、工事計画と発掘調査予定にかかる協議を定期的に行った。

### 第3節

新宮紀宝道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、三重県教育委員会が調査主体となり、三重県埋蔵文化財センターが調査を担当した。鵜殿西遺跡の現地調査は、平成 30 年度から令和 5 年度（第 1 ～ 5 ・ 7 ～ 10 次）まで実施した。報告書作成に伴う整理作業は、現地調査終了後に随時行い、報告書の刊行は令和 6 年度に行った。その体制及び各年度における担当は、以下のとおりである。

なお、第 6 次調査は、令和 3 年度に紀宝町教育委員会が防火水槽設置に伴い実施されたもので、別途報告されている<sup>(2)</sup>。

#### 【平成 26（2014）年度】

調査研究 2 課

課長 田中久生

主幹（課長代理）長谷川哲也 主査 原田恵理子

#### 【平成 27（2015）年度】

調査研究 2 課

課長 本堂弘之

主幹（課長代理）長谷川哲也

主査 原田恵理子 出村雅実

#### 【平成 28（2016）年度】

調査研究 2 課

課長 本堂弘之

主幹（課長代理）長谷川哲也

主幹 原田恵理子 技師 小原雄也

#### 【平成 29（2017）年度】

調査研究 2 課

課長 上村安生

主幹（課長代理）長谷川哲也

主幹 原田恵理子 技師 小原雄也

#### 【平成 30（2018）年度】

調査研究 2 課

### 調査の体制

副参事兼課長 上村安生

主幹（課長代理）長谷川哲也

主幹 源口元士 原田恵理子 技師 鐸木厚太

<第 1 次調査>

期間：平成 30 年 5 月 22 日～平成 30 年 7 月 28 日

面積：630 m<sup>2</sup>

担当：鐸木厚太 源口元士

発掘調査業務委託：西武緑化有限会社

<第 2 次調査>

期間：平成 30 年 9 月 20 日～平成 30 年 12 月 10 日

面積：843 m<sup>2</sup>

担当：鐸木厚太 源口元士

発掘調査業務委託：株式会社アーキジオ三重

空中写真測量委託：株式会社イビソク三重営業所

#### 【平成 31／令和元（2019）年度】

調査研究 2 課

副参事兼課長 竹田憲治

主幹（課長代理）新名強

主幹 小山憲一 宮崎浩伸 技師 鐸木厚太

業務補助員 唐木美早

<第 3 次調査>

期間：平成 31 年 4 月 23 日～令和 2 年 1 月 24 日

面積：4,788 m<sup>2</sup>

担当：鐸木厚太 宮崎浩伸

発掘調査業務委託：株式会社島田組三重営業所

保存処理委託：株式会社吉田生物研究所

#### 【令和 2（2020）年度】

調査研究 2 課

課長 新名強

主幹兼課長代理 宮崎浩伸

主事 若井啓漣 技師 鐸木厚太

発掘業務支援員 唐木美早 島田早織

<第4次調査>

期間：令和2年5月18日～令和2年12月16日  
面積：2,623 m<sup>2</sup>  
担当：宮崎浩伸 若井啓獎  
発掘調査業務委託：安西工業株式会社三重営業所  
空中写真撮影委託：株式会社コミュニケーション  
サービス  
保存処理委託：株式会社吉田生物研究所

【令和3（2021）年度】

調査研究2課

課長 新名強

主幹兼課長代理 宮崎浩伸

主事 若井啓獎 技師 鐸木厚太

発掘業務支援員 唐木美早 島田早織

<第5次調査>

期間：令和3年8月30日～令和4年1月21日

面積：1,661 m<sup>2</sup>

担当：宮崎浩伸 若井啓獎

発掘調査業務委託：株式会社島田組三重営業所

保存処理委託：株式会社吉田生物研究所

自然科学分析委託：日鉄テクノロジー株式会社

【令和4（2022）年度】

調査研究2課

課長 角正芳浩

課長代理 石井智大

主任 渡辺和仁 技師 鐸木厚太

発掘業務支援員 島田早織 中西千鶴 松本春美

<第7次調査>

期間：令和4年8月18日～令和4年10月28日

面積：567 m<sup>2</sup>

担当：渡辺和仁 鐘木厚太

発掘調査業務委託：橋本技術株式会社三重営業所

<第8次調査>

期間：令和5年2月1日～令和5年3月2日

面積：310 m<sup>2</sup>

担当：渡辺和仁 鐘木厚太

労務提供

<第9次調査>

期間：令和5年2月28日～令和5年3月6日

面積：92 m<sup>2</sup>

担当：渡辺和仁 鐘木厚太

労務提供

保存処理委託：株式会社吉田生物研究所

自然科学分析委託：日鉄テクノロジー株式会社

【令和5（2023）年度】

調査研究2課

課長 角正芳浩

主任 渡辺和仁 鐘木厚太

発掘業務支援員 有川芳子 島田早織 中西千鶴

<第10次調査>

期間：令和5年4月28日～令和5年7月4日

面積：485 m<sup>2</sup>

担当：渡辺和仁 鐘木厚太

発掘調査業務委託：橋本技術株式会社三重営業所

保存処理委託：株式会社吉田生物研究所

自然科学分析委託：一般社団法人文化財科学研究

センター

【令和6（2024）年度】

調査研究1課

課長 小瀬学

課長代理 渡辺和仁 主幹 中野環

主査 村田雄紀 主任 若井啓獎

発掘業務支援員 島田早織 中西千鶴

保存処理委託：株式会社吉田生物研究所

## 第4節 文化財保護法に係る諸手続き

文化財保護法等に係る諸通知は、以下のとおりである。

○埋蔵文化財包蔵地の把握について（文化財保護法第97条第1項にかかる遺跡発見通知）

・平成27年3月24日付け紀教生第40号

○周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更

・平成29年7月21日付け教理第135号

○土木工事等のための発掘に関する通知（文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項）

・平成29年12月6日付け国近整紀三工第244号（県教育長あて国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所長通知）

○発掘調査の着手報告（文化財保護法第99条第1

項)

・第2次調査

平成30年9月26日付け教埋第165号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

・第3次調査

平成31年4月26日付け教埋第48号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

・第4次調査

令和2年5月12日付け教埋第39号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

・第5次調査

令和3年9月2日付け教埋第145号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

・第7次調査

令和4年8月26日付け教埋第122号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

・第10次調査

令和5年5月2日付け教埋第20号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

○文化財の発見・認定通知（文化財保護法第100条第2項）

・第2次調査

平成30年12月20日付け教委第12-4422号（紀宝警察署長あて県教育長通知）

・第3次調査

令和2年1月31日付け教委第12-4420号（紀宝警察署長あて県教育長通知）

・第4次調査

令和3年1月22日付け教委第12-4425号（紀宝警察署長あて県教育長通知）

・第5次調査

令和4年2月14日付け教委第12-4418号（紀宝警察署長あて県教育長通知）

・第7次調査

令和5年1月12日付け教委第12-4411号（紀宝警察署長あて県教育長通知）

・第8・9次調査

令和5年3月23日付け教委第12-4420号（紀宝警察署長あて県教育長通知）

・第10次調査

令和5年7月20日付け教委第12-4503号（紀宝警察署長あて県教育長通知）

## 第5節

### 調査の方法

**調査区の設定** 新宮紀宝道路建設事業に伴う鵜殿西遺跡の発掘調査は、事業の進捗に合わせて以下のとおり年度ごとに調査区を設定した（第4図）。

第1次調査：10箇所の調査区（T区）。

第2次調査：1箇所の調査区。

第3次調査：7箇所（1～7区）及び20箇所の調査区（T区）。

第4次調査：5箇所（1～5区）の調査区。

第5次調査：3箇所（1～3区）の調査区。

第7次調査：2箇所（1・2区）の調査区。

第8次調査：1箇所の調査区。

第9次調査：1箇所の調査区。

第10次調査：1箇所の調査区。

**地区設定** 鵜殿西遺跡の発掘調査にあたり、道路完成後に周辺地域の開発が予想されることから、紀宝町教育委員会とも協議し、今後周辺で想定される発掘調査に対応できるよう100m四方の大地区を設定した。具体的には、世界測地系第IV座標系のX=

251,000m、Y=300mの地点を基点として、遺跡の北西隅から南東端までを網羅する100m×100mの大地区（A～L）を設定した（第3図）。

さらに、大地区の中に東西、南北とも100mを25分割した4m×4mを1単位とする小地区（以下、「グリッド」）を設定した（ただし、第7～9次調査については、調査区の形状に合わせて任意のグリッドを設定して調査を行った）。各グリッドは北西隅を基点とし、調査区の西から東へは1～25の算用数字、北から南へはA～Yのアルファベットを付与した。グリッドの名称は、大地区の記号を頭に、アルファベットと数字を組み合わせて表している（例：L-A1）。

**掘削と検出** 表土掘削は重機（バックホウ）を用いて行い、グリッドを表す地区杭の設置後に、人力により包含層掘削を行った。包含層掘削後は、ジョレンまたはステーキホー等で遺構面を精査し、遺構検出を行った。その際、遺構の重複関係などの検出状



第I-3図 調査区配置図 (1:2,500) ※鶴殿城跡の縄張図は、伊藤徳也 2019『再発見 東紀州の城』から引用のうえ合成



第I-4図 大地区割図(1:3,000)

況を記録するために、1/40の縮尺で遺構略測図（以下、「遺構カード」）をグリッドごとに作成した。さらに、遺構カードをもとに1/100の遺構略測図を作成し、掘立柱建物や遺跡全体の性格についての検討を行った。遺構掘削は、遺構カード記入後、順次手作業で行った。

**遺構番号** 小穴（以下、「ピット」）以外の遺構については、例言で示したSK・SHなど遺構の形態等を表す略号を冠した上で、調査次数及び調査区毎に通し番号を付与した。

第2次調査では、4桁目（千の位）に調査次数、3桁目（百の位）以下が通し番号（2001～）とした。第3次調査では、5桁目（万の位）に調査次数、4桁目（千の位）に調査区名、3桁目（百の位）以下が通し番号としており、1区は31001～、同2区は32001～となる。この番号の振り方は第4・5・7次調査においても同様である。第8・9次調査では、5桁目（万の位）に調査次数、4桁目（百の位）以下が通し番号となっている。第10次調査では5桁目（万の位）を1とし、4桁目（百の位）以下が通し番号となっている。

ピットについては、基本的にグリッド毎に遺物の出土したもののみについて付与しているが無遺物のものであっても、掘立柱建物を構成する柱穴など、必要と判断したものについては番号を付与した。

**遺構実測図** 第1・3～5・7～10次調査の遺構平面図については、縮尺1/20で手書き実測を行った。第2次調査については、ドローンを使用した空

中写真測量を実施し、縮尺1/50、1/100、1/200の遺構図・等高線図・遺構平面図を作成した。この場合、「遺構図」には遺構のみを、「等高線図」には遺構と等高線を、「遺構平面図」には遺構、等高線と標高を記載した。

調査区及び遺構の土層断面図は、基本的に縮尺1/20で作成した。特に重要と思われる遺構については、個別に縮尺1/10などの実測図を作成した。

**写真撮影** 遺構写真、土層断面写真、調査状況写真是、イメージセンサーサイズが概ね24mm×16mmのAPS-C一眼レフカメラ（Nikon D3300）で撮影した。調査区全体写真及び特に重要と思われる遺構写真是、イメージセンサーサイズが概ね36mm×24mmのフルサイズ一眼レフカメラ（Nikon D800）を使用した。また、コンパクトデジタルカメラ（olympus TG625など）も適宜使用した。完掘後の遺構や調査区全景の撮影は、約5mの足場あるいは高所作業車の上から行った。第2・4次調査については、ドローンでの空中写真撮影を行った。使用したカメラは、イメージセンサーサイズが概ね36mm×24mmのフルサイズ一眼レフカメラ（Canon Eos5DMark IIなど）である。

**整理作業** 出土遺物は、調査次数ごとに洗浄→接合→注記を行った後、出土地点・出土遺構ごとに分類した。さらに実測すべき遺物を選別し、各個別遺物の実測図を作成した。実測された遺物は、実測図との照合ができるように遺物と図面の両方に調査次数ごとの実測登録番号（R 001-01～）を与えた。

## 第6節 調査の経過

発掘調査の経過は、次のとおりである。なお、調査にあたっては、国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所（以下、紀南河川）、三重県県土整備部近畿道紀勢線推進プロジェクトチーム（以下、県PT）、紀宝町教育委員会教育課（以下、町教委）等の関係機関と適宜協議を行った。

### 【第1次調査】

平成30（2018）年度

4月20日 町教委に発掘調査計画を説明。

5月15日 関係機関と協議。

5月29日 調査地の現地確認。

6月12日 T1～3の表土掘削開始。

6月13日 下層掘削開始。T2において基盤層を検出。基盤層から湧水を確認。T4の表土掘削開始。

6月14日 T6の表土掘削開始。

6月15日 T8～10の表土掘削開始。

6月20日～22日 降雨のため作業中止。

6月25日 T4の包含層掘削開始。

6月26日 T5・7の包含層掘削開始。

6月27日 T1～7の埋め戻し完了。

7月2日 T8～10の包含層掘削開始。T8から煙管が出土。

7月3日 T 10 の記録作業終了。

7月9日 T 9 の記録作業終了。現地作業終了。

#### 【第2次調査】

平成 30 (2018) 年度

8月2日 調査地の現地確認。

10月10日 表土掘削開始。

10月24日 表土から縄文土器が出土。

10月29日 土坑(SK 20009)から南伊勢系鍋が出土。

10月30日 掘立柱建物(SB 20011)を確認。

11月2日 ピットを多数検出。掘立柱建物が複数存在するとみられる。

11月6日 土坑(SK 20021)から鉄鎌が出土。

11月16日 現地説明会準備。

11月17日 現地説明会開催。60名参加。

11月21日 空中写真測量を行う。

11月26日 現地作業終了。

#### 【第3次調査】

平成 31／令和元 (2019) 年度

4月1日 熊野市内に整理所を開所。

5月27日 1区の表土掘削開始。

6月12日 溝(SD 31001)から中世の土師器皿・鍋等が多数出土。

8月8日 2区の全景写真撮影。

9月6日 4区の全景写真撮影。

10月1日 T 18 の調査開始。

10月10日 1・2区の引き渡しを行う。

10月11日 台風19号接近に伴う対策を講じる。

10月13日 台風19号通過後の現地確認。

10月15日 溝(SD 35003)から土師器鍋が多数出土。

10月24日 土坑(SK 33018)、溝(SD 33019)を掘削。前後関係を確認。

10月28日 3区の補足調査を行う。縄文土器が出土するも、遺構はなし。

10月30日 5区の全景写真撮影。

11月30日 現地説明会開催。84名参加。

12月9日 紀宝町立成川小学校の現場見学会実施。

12月11日 熊野市立井田小学校の現場見学会実施。

12月12日 紀宝町立鵜殿小学校、矢渕中学校の現場見学会実施。

12月16日 5・6区の引き渡しを行う。

12月23日 7区の全景写真撮影。

12月25日 7区の補足調査を行う。

1月16日 7区の引き渡しを行う。現地作業終了。

#### 【第4次調査】

令和2 (2020) 年度

4月16日 関係機関と協議。

5月19日 表土掘削開始。

5月25日 遺構掘削開始。井戸(SE 42001)から中世の土師器出土。

6月8日 4区の遺構検出及び遺構掘削開始。

6月9日 2区の埋め戻し溝(SE 44003)を検出。

6月26日 南北方向に延びる溝(SD 44015)を検出。

7月31日 4区南の埋め戻し終了。

8月5日 4区北の遺構掘削開始。東西に延びる溝(SD 44021)から遺物多数出土。

8月7日 2区の引き渡しを行う。

8月17日 4区北の遺構掘削終了。

9月9日 3区の全景写真撮影。

9月15日 5区南の補足調査を行う。

9月24日 紀南河川と現地協議。

9月30日 紀宝町立相野谷中学校の生徒4名に対して体験発掘を実施。

10月1日 5区南の全景写真撮影。

10月5日 5区の遺構実測終了。

10月27日 3～5区の引き渡しを行う。

10月29日 1区東側の遺構検出開始。

11月11日 1区の全景写真撮影。

11月26日 1区の引き渡しを行う。現地作業終了。

12月7日 遺跡全景の空中写真撮影。

#### 【第5次調査】

令和3 (2021) 年度

6月8日 関係機関と協議

9月14日 関係機関と現地協議。

9月24日 表土掘削開始。

10月6日 3区東側の全景写真撮影。

10月12日 3区東側の引き渡しを行う。

10月20日 3区西側の遺構掘削終了。

10月28日 3区西側の引き渡しを行う。

11月5日 2区北側の遺構実測終了。

11月15日 溝(SD 52002)から銭貨・石鍋出土。

11月16日 溝（SD 52002）の出土状況図を作成。  
11月19日 2区南側の全景写真撮影。  
11月24日 2区南側の遺構実測終了。  
11月25日 2区の引き渡しを行う。  
11月26日 1区の遺構掘削開始。  
12月12日 土坑（SK 51017）の出土状況図を作成。  
12月18日 現地説明会開催。38名参加。  
12月27日 1区の引き渡しを行う。現地作業終了。  
3月31日 熊野整理所を閉所。

#### 【第7次調査】

令和4（2022）年度  
5月12日 関係機関とオンラインで協議。  
8月22日 関係機関と現地協議。  
9月2日 表土掘削開始。  
9月15日 1区の全景写真撮影。  
9月22日 1区の引き渡しを行う。台風15号接近に伴う対策を講じる。  
9月27日 2区北側の全景写真撮影。  
10月4日 2区南側の全景写真撮影。テレビの取材対応。  
10月6日 SD70001の補足調査を行う。  
10月13日 2区の引き渡しを行う。現地作業終了。

#### 【第8次調査】

令和4（2022）年度  
1月13日 関係機関と現地協議。  
2月1日 表土掘削開始。

2月7日 遺構掘削開始。  
2月21日 職員によるドローンでの全景写真撮影。  
3月2日 現地作業終了。

#### 【第9次調査】

令和4（2022）年度  
2月28日 表土掘削開始。  
3月1日 遺構掘削開始。  
3月6日 現地作業終了。

#### 【第10次調査】

令和5（2023）年度  
4月14日 関係機関と現地協議。  
5月15日 表土掘削開始。  
5月17日 遺構検出開始。  
5月23日 遺構掘削（SK 10012～10017）。  
5月25日 全景写真撮影。  
5月30日 調査区北半の遺構実測開始。  
6月5日 調査区北半の部分写真撮影。  
6月7日 溝（SD 10023）、土坑（SK 10029）の掘削。調査区北半の引き渡しを行う。  
6月8日 土坑（SK 10041・10042）の掘削、記録作業終了。  
6月13日 溝（SD 10001・10023）の掘削。掘立柱建物（SB 10035・10036・10044）の柱穴を半裁。  
6月16日 調査区南半の全景写真撮影。現地作業終了。

## 第7節 普及公開活動

発掘調査に伴う普及公開活動としては、現地説明会、体験発掘、遺跡見学会、職場体験、展示のほか、調査だよりの発行、ホームページやフェイスブックによる情報発信を行った。

現地説明会は発掘調査現地で遺跡の中を歩き、出土遺物を間近で見ていただいた。第2次調査では（平成30年11月17日（土））60名、第3次調査では（令和元年11月30日（土））84名、第5次調査では（令和3年12月18日（土））38名の参加を得た。

体験発掘は平成30年10月30日（水）・31日（木）に三重県県土整備部熊野建設事務所職員を対象に行い18名の参加を得た。令和2年11月13日（水）には三重県県土整備部熊野建設事務所職員18名を

対象に実施した。

遺跡見学会は令和元年12月9日（月）から12日（木）の4日間にわたり、紀宝町内の小中学校を対象に実施し、のべ263名の参加を得た。職場体験は令和2年9月30日（水）に紀宝町立相野谷中学校2年生4名を対象に実施した。

展示は、三重県熊野庁舎県民ホールにおいて「鵜殿西遺跡の調査成果」（令和2年10月6日（火）～令和3年1月22日（金））を、紀宝町生涯学習センター「まなびの郷」において「鵜殿西遺跡の調査成果」（令和3年2月13日（土）～2月28日（日））を行った。情報発信として、地元の方々や関係者に発掘調査の成果を知っていただくために『新宮紀宝道路調査

次 数	調査区	面積(m <sup>2</sup> )	期間	主な遺構	主な遺物
1	計	630	H30.5.22～H30.7.28	—	
	T 1	80		—	陶器（山茶碗）、陶器
	T 2	90		—	—
	T 3	60		—	土師器、陶器
	T 4	80		—	陶器（山茶碗）
	T 5	40		—	土師器、白磁、磁器
	T 6	70		—	陶器（山茶碗）、陶器
	T 7	70		—	—
	T 8	40		—	陶器（山茶碗）、陶器、金属製品
	T 9	50		—	土師器、磁器
	T 10	50		—	土師器
2	計	843	H30.9.20～H30.12.10	掘立柱建物、井戸、土坑、溝	縄文土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦、金属製品など
3	計	4,788	H31.4.23～R2.1.24	掘立柱建物、土坑、井戸、溝	縄文土器、須恵器、土師器、陶器（山茶碗）、陶器、瓦質土器、青磁、土鍤など
	1区	578.7			
	2区	687.5			
	3区	450.6			
	4区	384			
	5区	211.6			
	6区	354.8			
	7区	1,326.8			
	T 1	40		—	—
	T 2	40		—	—
	T 3	40		—	—
	T 4	60		—	—
	T 5	40		—	—
	T 6	60		—	—
	T 7	40		—	—
	T 8	60		—	—
	T 9	60		—	—
	T 10	30		—	—
	T 11	20		—	—
	T 12	42		—	—
	T 13	20		—	—
	T 14	10		—	—
	T 15	32		—	—
	T 16	60		—	—
	T 17	60		—	—
	T 18	40		—	—
	T 19	20		—	—
	T 20	20		—	—
4	計	2,623	R2.5.18～R2.12.16	掘立柱建物、土坑、井戸、溝	縄文土器、土師器、陶器（山茶碗）、陶器、磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品など
	1区	217			
	2区	168.2			
	3区	281.9			
	4区	1,010.9			
5	計	945	R3.8.30～R4.1.21	土坑、溝	土師器、陶器（山茶碗）、陶器、磁器、瓦、土鍤、石鍋、錢貨、金属製品など
	1区	654.7			
	2区	510.2			
	3区	496.1			
7	計	567	R4.8.18～R4.10.28	土坑、溝	土師器、陶器（山茶碗）、陶器、磁器、金属製品など
	1区	103.6			
	2区	463.6			
8	計	310	R5.2.1～R5.3.2	掘立柱建物、土坑、井戸、溝	土師器、須恵器、陶器（山茶碗）、陶器、磁器など
9	計	92	R5.2.28～R5.3.6	溝	土師器、陶器（山茶碗）、陶器、磁器、石製品など
10	計	485	R5.4.28～R5.7.4	掘立柱建物、土坑、溝	土師器、須恵器、陶器（山茶碗）、陶器、磁器、石製品など
総計		11,156			

第 I - 1 表 一般国道 42 号新宮紀宝道路事業に伴う鶴殿西遺跡発掘調査一覧

ニュース うどの』№.1～5を発行した。また、令和5年11月19日（日）に、『鵜殿西遺跡発掘調査成果報告会』を紀宝町生涯学習センター「まなびの郷」きらめきホールにおいて開催し、40名の参加を得た。 （角正芳浩 渡辺和仁 若井啓選）



写真1 現地説明会（第2次調査）

[註]

- (1) 国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所ホームページ  
「道の情報 Information of Road」
- (2) 紀宝町教育委員会 2023『鵜殿西遺跡（第6次）発掘調査報告』

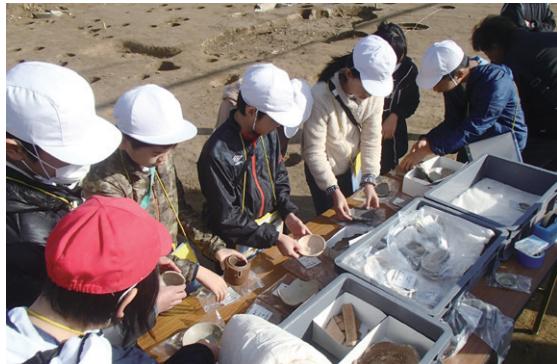


写真2 地元小学校を対象とした遺跡見学会

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

一般国道42号新宮紀宝道路建設事業に伴い発掘調査を行った鵜殿西遺跡は南牟婁郡紀宝町に所在する。紀宝町は、三重県最南端部の熊野川最下流域左岸に位置する。東は七里御浜により熊野灘を臨み、北部は熊野市、西部は御浜町、南は熊野川を隔てて和歌山県新宮市と接している。

大台ヶ原に源を発する熊野川は流域のほとんどを山地が占め、平地は河口部にわずかに広がる程度である。紀宝町の中央部には、熊野川の支流相野谷川が北から南へ流れ熊野川河口近くに注ぐ。その東部では、神内川が熊野灘に向かって北から南へ流下する。熊野灘沿岸の河口部や海岸部には砂州や後背低地、小規模な海岸平野が形成される。鵜殿西遺跡は熊野川河口近くの左岸に位置し、神内川が形成した自然堤防上に立地する。

熊野灘に注ぎ込む尾呂志川、市木川、産田川等の小河川の流域には谷底平野や氾濫平野が見られ、砂州や砂堆によって閉塞された下流域には小規模な低地や潟湖が形成されている。熊野川河口付近では、熊野市南部まで緩い弓状の海岸線が熊野川によって運ばれた大量の土砂と沿岸流とによって形成されており、七里御浜と呼ばれている。七里御浜は礫を主体とする礫浜で、円磨度の高い円礫が多く、古くから石細工や庭園の砂利敷などに利用されてきた。

熊野川流域や七里御浜を含む三重県、奈良県、和歌山県にまたがる地域一帯は「吉野熊野国立公園」に指定され、さらにその一部が「紀伊山地の霊場と参詣道（伊勢路）」として世界文化遺産に登録されている。



第Ⅱ-1図 事業地位置図 (1:2,000,000)

### 第2節 歴史的環境

紀宝町を含む東紀州地域<sup>(1)</sup>では、これまで大規模な開発事業が少なく、それに伴う発掘調査もあまり行われてこなかった。しかし近年の紀勢自動車道（起点：三重県勢和多気JCT～終点：和歌山県南紀田辺IC）の延伸により、道路建設事業地内において遺跡の分布調査や発掘調査が進んでいる。鵜殿西遺跡は、その一部が紀勢自動車道新宮紀宝道路の建設事業予定地にあたるため、平成30年度より本格的な発掘調査を開始した。

鵜殿西遺跡（旧鵜殿遺跡）（1）では、旧鵜殿村

教育委員会によって2度の試掘調査が行われている。わずかな調査面積であるため、遺構の詳細は不明ながら、青磁碗や白磁碗、山茶碗・山皿など、鎌倉から室町時代を中心とした遺物が出土している。調査地は、鵜殿城跡（6）の東麓裾にあたる部分であり、「鵜殿氏」との関係が指摘されている<sup>(2)</sup>。

以下、周辺の遺跡について概観する。

旧石器・縄文時代 東紀州地域では、これまでに確実な旧石器時代の遺跡は確認されていない。この地域で人間の営為の痕跡が認められるようになるの

は、現在のところ縄文時代早期以降である。

鵜殿西遺跡周辺に存在する遺跡として、熊野市有馬町釜の平遺跡や同市紀和町楊枝遺跡、紀宝町成川地区の成川遺跡（10）、和歌山県新宮市速玉大社境内遺跡（18）、同市新宮下本町遺跡（20）などがある。釜の平遺跡は、七里御浜と志原池に挟まれた標高10m前後の砂丘上に立地する。終戦直後の開拓によって遺物が地表面に露出したことで存在が知られた。その規模は東西約500mに及び、多数の遺物が採集されている。石器は時期が明確でないが、石鏃が少ないことが特徴とされる。土器は中期から後期にかけてのものを中心に早期末から後期にいたるもののが確認されている。土器は西日本の船元式を中心に関東地方の五領ヶ台式や北陸地方の新崎式に類似するものがみられ、東西文化の交流がうかがわれる<sup>(3)</sup>。成川遺跡では、成川小学校の校庭内から採集および発掘調査により土器・石器が出土している。石器は時期を限定されていないが、後期を中心に中期から晩期の土器が出土していることから同時期に属すると考えられている<sup>(4)</sup>。熊野川を河口から約20km遡った楊枝遺跡では、晩期の土器が出土している<sup>(5)</sup>。

熊野川右岸では、速玉大社境内遺跡で中期から晩期までの土器や石器が出土している<sup>(6)</sup>。新宮下本町遺跡では、中期の土坑や小穴などが確認されている<sup>(7)</sup>。

弥生時代 発掘調査が行われた遺跡としては、熊野市有馬町津ノ森遺跡、新宮市阿須賀神社遺跡（26）などがある。津ノ森遺跡は紀伊山地を開析して流れる産田川が奥熊野の平野部に達して形成する小規模な扇状地上に立地する。これまで5次にわたる発掘調査が行われ、竪穴住居や掘立柱建物の一部と推定される遺構とともに石器・土器・玉類等のほか、砂岩製の銅鐸形石製品とも考えられる用途不明の石製品も出土している<sup>(8)</sup>。このほか発掘調査は行われていないが、紀宝町内の中尾地遺跡（15）、井田上野遺跡（16）などで遺物が採集されている<sup>(9)</sup>。新宮市阿須賀神社遺跡では、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴建物や掘立柱建物が確認されている<sup>(10)</sup>。また、神倉神社境内のコトビキ岩の陰から銅鐸の破片が出土している<sup>(11)</sup>。

古墳時代 和歌山県那智勝浦町下里で5世紀頃の築造とされる竪穴式石室を有する前方後円墳である下里古墳が確認されている<sup>(12)</sup>。熊野市から南牟婁郡一帯にかけてを含む紀伊半島南部地域では、これ以外の古墳は現在までのところ確認されていない。津ノ森遺跡からは滑石製の勾玉や双孔円板、須恵器杯身など中期から後期にかけての遺物が出土しており、この地域における当該期の数少ない資料である<sup>(13)</sup>。新宮城下町遺跡では初頭から前期の竪穴建物や土坑から甕や高杯、鉢が出土しているほか、須恵器片が出土しており、後期にかけての生活の痕跡がうかがわれる<sup>(14)</sup>。高岡遺跡（14）では、弥生時代末から古墳時代初頭の土器が採集されている<sup>(15)</sup>。

古代 当地域は、律令制下における行政区分では紀伊国牟婁郡神戸郷に属したと考えられる<sup>(16)</sup>。『紀伊続風土記』によれば、神戸郷は熊野の神領とされる<sup>(17)</sup>。郷内には『延喜式神名帳』に記載された神社は存在しない<sup>(18)</sup>。平城宮跡からは、「无漏郡進上贊少辛螺頭打」（木簡番号2284）、「紀伊国无漏郡進上贊磯鯛八升」（木簡番号2285）、「紀伊国无漏郡太海細螺八升」（木簡番号0）と書かれた荷札木簡が出土しており、贊として牟婁郡から海産物が貢進されていたことが知られる<sup>(19)</sup>。津ノ森遺跡では、奈良時代から室町時代にかけての土師器や須恵器、陶器、瓦質土器などが出土しており、連綿と集落が営まれていたものと考えられている<sup>(20)</sup>。

中世 当地域では鵜殿城跡（2）をはじめ、桐原上地城跡、桐原下地城跡、京城跡（19）、神内城跡、浅里城跡、桧枝城跡、飯盛城跡（7）など、多数の中世城館が存在する<sup>(21)</sup>。鵜殿城跡と飯盛城跡は、紀宝町立矢淵中学校を取り囲む丘陵にあり、ともに居住性が極めて悪く見張り台としての機能が高いと考えられる<sup>(22)</sup>。紀宝町大里の羽山地遺跡（16）では、山茶碗や青磁碗が出土しており、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての集落があったと考えられる。また、2棟の掘立柱建物が確認されており、京城あるいは江戸から明治期に存在した東泉寺に伴うものと考えられる<sup>(23)</sup>。鵜殿一帯には南北朝期に熊野新宮領の鵜殿莊が置かれ、鵜殿氏が庄司として支配していた<sup>(24)</sup>。また、熊野川河口部には新宮津が所在し、流通の水運拠点として栄えていた<sup>(25)</sup>。新宮下本町

遺跡では、12～16世紀の港湾に関する遺構や多数の地下式倉庫が確認されているほか、新宮城跡の水ノ手郭でも20棟の炭納屋跡が確認されるなど、この地域が港湾都市として繁栄していたことがうかがわれる<sup>(26)</sup>。

近世 江戸時代に入ると、新宮・鵜殿の双方に「新宮廻船」「鵜殿廻船」と呼ばれる廻船仲間が成立し、木材や薪炭等の熊野の山産物を中心に、江戸や上方への流通・交易で発展した<sup>(27)</sup>。新宮城下町遺跡では、土坑から渥美・常滑産の甕や山茶碗が出土したほか、湊に関わる施設と考えられる地下式倉庫を数多く検出し、瀬戸を中心として常滑や備前の陶器、南伊勢系土師器の鍋や皿、中国製陶磁器が出土している<sup>(28)</sup>。

鵜殿については、一部を旗本領として鵜殿氏が領有していたが、宝永5年(1708)鵜殿氏の断絶により紀州藩本領とされた。しかしながら、城下町として整備された新宮に対し、熊野川対岸の鵜殿の状況は詳らかでない。

鵜殿氏について 鵜殿氏は、熊野別当家の一流として熊野別当や御師を勤めていたことが史料から確認される<sup>(29)</sup>。出自・土着については諸説ある。『寛政重修諸家譜』によれば、藤原氏の子孫を称し熊野[註]

- (1) 紀北町、尾鷲市、熊野市、御浜町、紀宝町の5市町の総称。
- (2) 鵜殿村教育委員会(刊行年度不明)『鵜殿遺跡発掘調査概要I』、鵜殿村教育委員会 1991『鵜殿遺跡発掘調査概要II』、鵜殿村史編さん委員会 1991『鵜殿村史 史料編』鵜殿村
- (3) 熊野市史編さん委員会 1983『熊野市史』上巻 熊野市
- (4) 久保勝正 1996「熊野川流域の遺跡その② - 南牟婁郡紀宝町成川小学校遺跡・高岡遺跡の石器類を中心にして」『斎宮歴史博物館研究紀要』5 斎宮歴史博物館
- (5) 紀和町教育委員会(刊行年度不明)『楊枝遺跡発掘調査概要』
- (6) 新宮市史編纂委員会 1973『新宮市史』史料編上巻 新宮市
- (7) 新宮市教育委員会・公益財団法人和歌山県文化財センター 2021『新宮城下町遺跡』、新宮市教育委員会 2022『新宮下本町遺跡総合調査報告書』
- (8) 熊野市教育委員会 1982『津ノ森遺跡発掘調査概要』、熊野市教育委員会 1982『津ノ森遺跡発掘調査概要II』、熊野市教育委員会 1983『津ノ森遺跡発掘調査概要III』、熊野市教育委員会 1984『津ノ森遺跡発掘調査概要IV』
- (9) 紀宝町 2004『紀宝町誌』
- (10) 前掲註(6)文献
- (11) 前掲註(6)文献
- (12) 那智勝浦町史編さん委員会 1980『那智勝浦町史 上巻』那智勝浦町
- (13) 前掲註(8)文献
- (14) 前掲註(7)文献
- (15) 三重県南牟婁郡教育会 1925『紀伊南牟婁郡誌 下巻』
- (16) 名古屋市博物館編 1992『和名類聚抄』(名古屋市博物館資料叢書II) 名古屋市博物館
- (17) 仁井田好古等編『紀伊続風土記』
- (18) 『延喜式 上』(財団法人神道体系編纂会 1993『神道体系古典12』)
- (19) 奈良文化財研究所 1974『平城宮木簡2 平城宮発掘調査報告

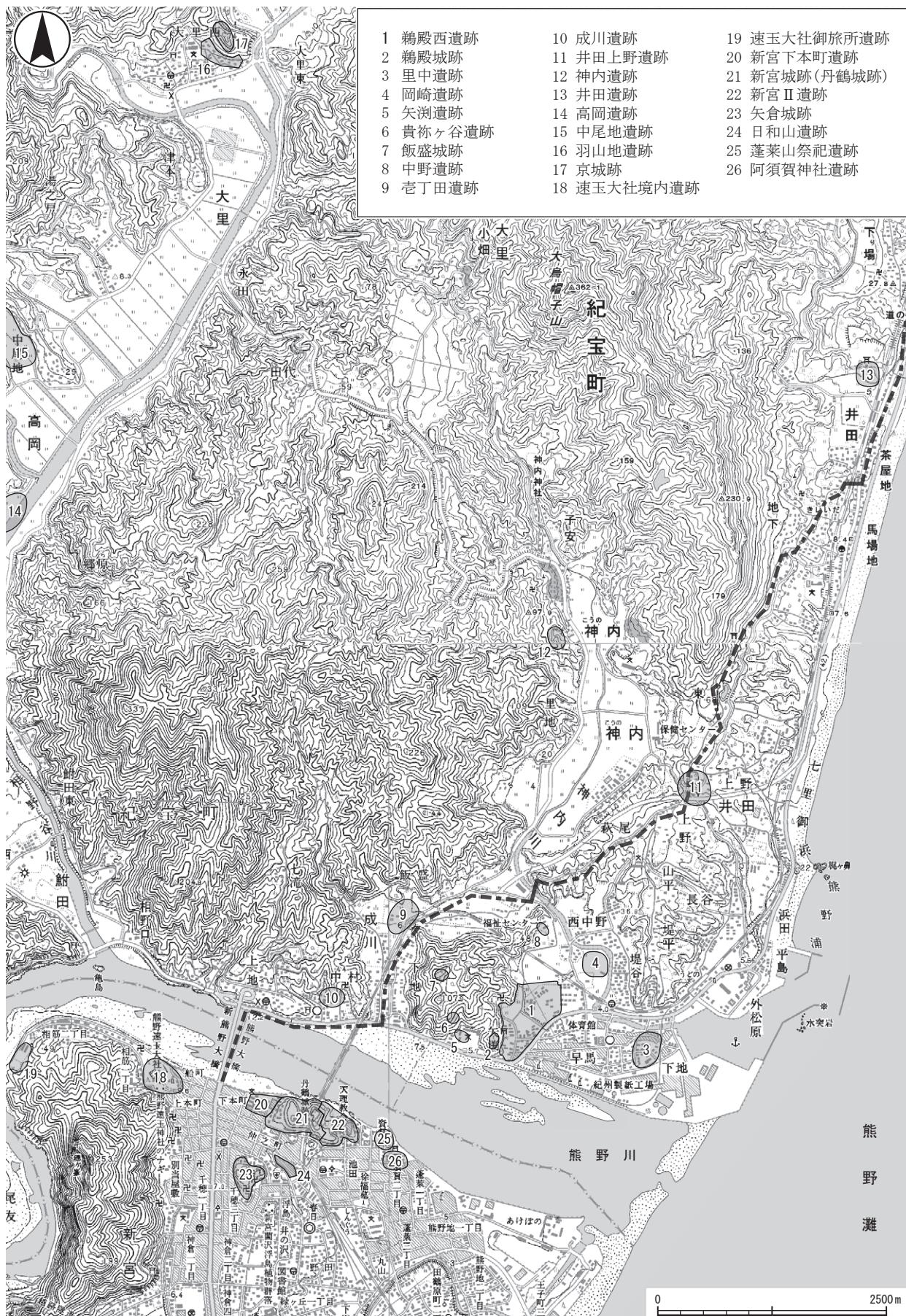
別当湛増の子が鵜殿に居住したことから鵜殿姓を名乗ったとするが、熊野七人上綱の子孫とも伝わるとする<sup>(30)</sup>。それ以前の『寛永諸家系図伝』では秦氏としている<sup>(31)</sup>。系図も『鵜殿系図』<sup>(32)</sup>、『熊野別当系図』<sup>(33)</sup>など諸説あるが、鵜殿系図については熊野別当家に在地の有力氏族を血縁的に繋いだものと推測されている<sup>(34)</sup>。鵜殿の姓を資料で確認できるのは鎌倉時代以降のことである<sup>(35)</sup>。南北朝期の鵜殿氏は当初は南朝方にいたが、のちに北朝方の武将として行動する。鵜殿城を拠点に「鵜殿庄司」として鵜殿荘を管理・支配し、鵜殿城近くに居館を構えていたと考えられる。同時に熊野新宮の神官も務めていた。13世紀にはいると熊野別当家が衰退し、鵜殿氏も在地勢力の一つとなる。戦国末期には七上綱<sup>(36)</sup>も衰退し、代わって台頭した堀内氏と姻戚関係を結ぶが、関ヶ原合戦で西軍に与したため浪人となる。これとは別に、水野忠仲の新宮入部以前から旗本鵜殿氏(鵜殿宗家)が鵜殿の地を知行地として宛がわれていたことが知られるが、のちに嗣子断絶により絶家没収される<sup>(37)</sup>。これにより鵜殿氏と鵜殿の地との関係は途絶える。鵜殿氏は複数の旗本家以外にも、鳥取藩家老等諸家がある。

(角正芳浩 渡辺和仁)

- VIII、奈良文化財研究所 1989『平城宮発掘調査出土木簡概報21-長屋王家木簡1-』
- (20) 前掲註(8)文献
- (21) 三重県教育委員会 1976『三重の中世城館』
- (22) 伊藤裕偉 2011『聖地熊野の舞台裏-地域を支えた中世の人々-』高志書院
- (23) 紀宝町教育委員会 2011『羽山地遺跡(第1次)発掘調査報告』、紀宝町教育委員会 2014『羽山地遺跡(第2次)発掘調査報告』
- (24) 鵜殿村編さん委員会 1994『鵜殿村史』通史編 鵜殿村
- (25) 綿貫友子 2022『第3節中世新宮にわたる海上交通と物流』『新宮下本町遺跡』新宮市教育委員会
- (26) 新宮市教育委員会 1992『新宮下本町遺跡総合調査報告書』
- (27) 三重県 2020『三重県史 通史篇 近世2』
- (28) 前掲註(26)文献
- (29) 『二中歴』(『新訂増補史籍集覽 第5冊』1967 臨川書店)、『経俊卿記』(『図書寮叢刊』1970 明治書院)
- (30) 『寛政重修諸家譜』巻第742・743(『新訂完成重修諸家譜』統群書類從完成会)
- (31) 『寛永諸家系図伝』1992 統群書類從完成会
- (32) 『鵜殿系図并文書』東京大学資料編纂所影写本(鵜殿村史編さん委員会編 1991『鵜殿村史 史料篇』鵜殿村)
- (33) 統群書類從完成会 1925『統群書類從』第6輯下
- (34) 鵜殿村史編さん委員会 1994『鵜殿村史 通史篇』鵜殿村
- (35) 『経俊卿記』建長6年9月条に鵜殿法橋長存が見える
- (36) 僧綱の地位にあった宮崎・矢倉・中脇・滝本・箕島・芝・楠の7氏
- (37) 前掲註(34)文献

#### [参考文献]

紀宝町 2004『紀宝町誌』



第II-2図 鶴殿西遺跡及び周辺遺跡位置図(1:60,000)

## 第Ⅲ章 遺構

### 第1節 基本層序

全体の土層を整理したうえで状況を述べる。(第Ⅲ-1図～第Ⅲ-4図を参照)。

現況は、宅地、道路敷などであった。現況地盤直下の表土は、10YR7/6 明黄褐色極細粒砂～粗砂、10YR7/8 黄橙色粗砂などで、厚さは 0.2m～0.9m 程度であった。南北方向の現況地盤の標高は、調査区北端付近 (J-F22 地区) で 5.2m 程度であった。標高は南にむけて 6.0m (L-P13 地区) と徐々に高くなり 0.8m 程度の比高差があった。また、東西方向の現況地盤の標高は、調査区北側の東端付近 (J-Q20 地区) で 4.8m 程度、標高は西端 (J-04 地区) にむけて 5.4m と徐々に高くなり比高差は 0.6m 程度、調査区南側の東端付近 (L-P13 地区) で 7.9m 程度、標高は西端 (K-M25 地区) にむけて 6.0m と徐々に高くなり比高差は 0.1m 程度であった。

表土下には、7.5YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂、10YR5/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂、10YR3/4 暗褐色シルト、10YR7/5 明黄褐色極細粒砂～シルト

などの 1～3 層を確認した。一部に炭化物が含まれていた。調査区内で遺物包含層は確認できなかった。

上記の層の下で、遺構を検出した。検出面は、10YR5/6 黄褐色極細粒砂、10YR5/6 黄褐色シルト、10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂、10YR5/6 黄褐色極細粒砂～シルトなどで、一部で礫を含んでいた。南北方向の検出面の標高は、調査区北端付近 (J-F22 地区) で 4.3m 程度であった。標高は南にむけて 5.4m (L-P13 地区) と徐々に高くなり 1.1m 程度の比高差があった。また、東西方向の検出面の標高は、調査区北側の東端付近 (J-Q20 地区) で 4.8m 程度、標高は西端 (J-04 地区) にむけて 5.4m と徐々に高くなり比高差は 0.6m 程度、調査区南側の東端付近 (L-P13 地区) で 5.3m 程度、標高は西端 (K-M25 地区) にむけて 6.0m と徐々に高くなり比高差は 0.7m 程度であった。

全体としては、南から北に、西から東にむけて低くなる様相を示している。

### 第2節 検出された遺構

鵜殿西遺跡 (第 1～5・7～10 次) 発掘調査で検出された遺構は、掘立柱建物及び柱列、土坑、井戸、溝、その他性格不明遺構がある。

各調査次数での調査区の配置状況は、事業地内での様々な制約によって、細かく分割して調査せざるを得なかった (第Ⅰ章第5節参照)。そのため、同一の遺構が異なる調査次数に分かれて調査を行ったものが多くあったことから、以下の遺構報告に当たっては、調査時からの遺構番号の整理を行った遺構報告番号として報告している (凡例 参照)。また、本書作成に伴う検討の過程で、新たに遺構として認

識したものや調査時は遺構としたが、遺構ではないと判断したものもあるため、遺構番号の増減・欠番が生じていることを断っておく。

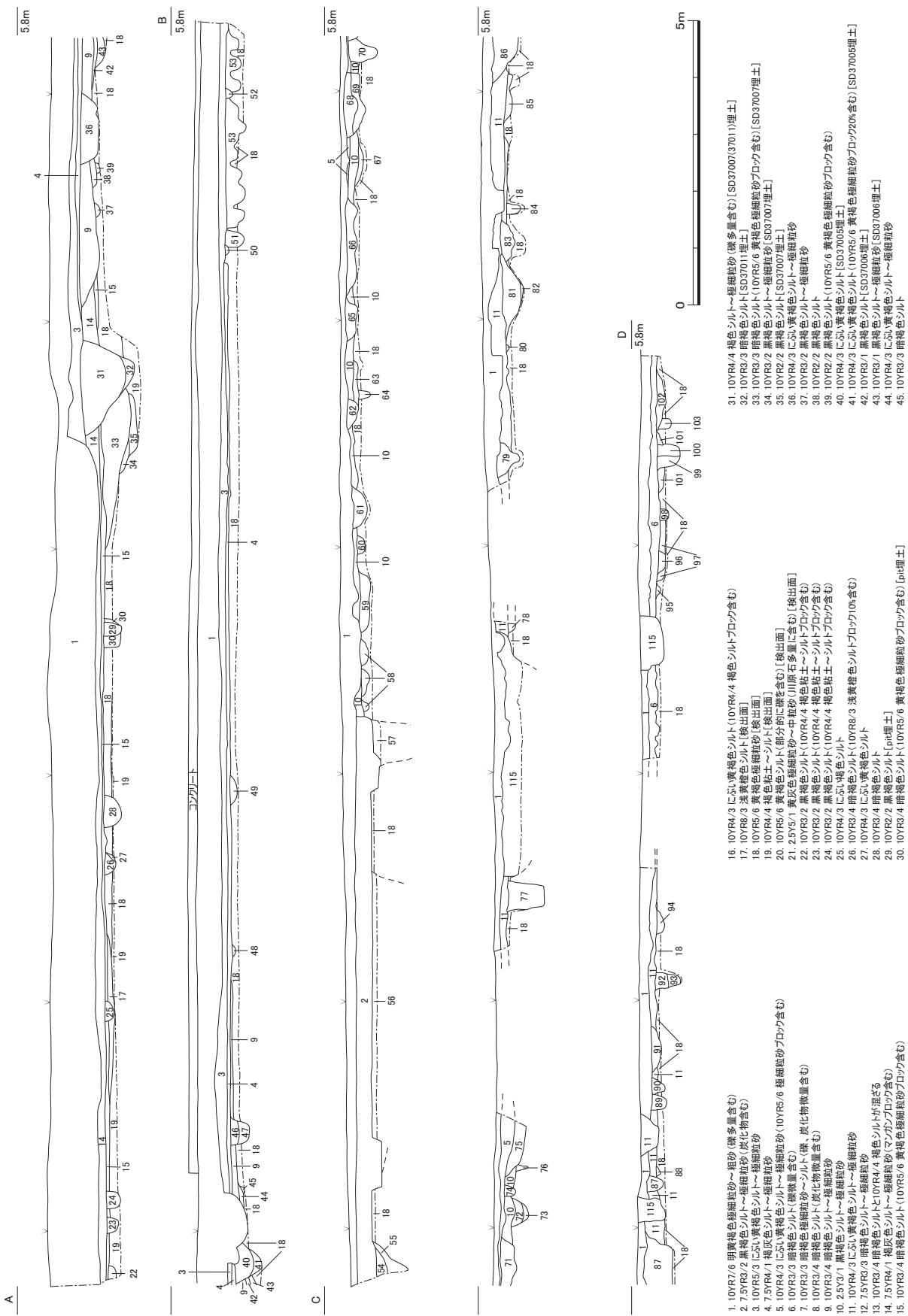
次節以降の遺構報告については、掘立柱建物・柱列、土坑・井戸、溝、その他性格不明遺構の種別順に報告するが、このうち土坑・井戸については、その峻別が困難なものが多くあったため、土坑ないし井戸として同一節で報告する。

また、遺構種別ごとの報告順は、遺構番号が早い順としており、時期ごとのまとまりでの記載を行っていない。

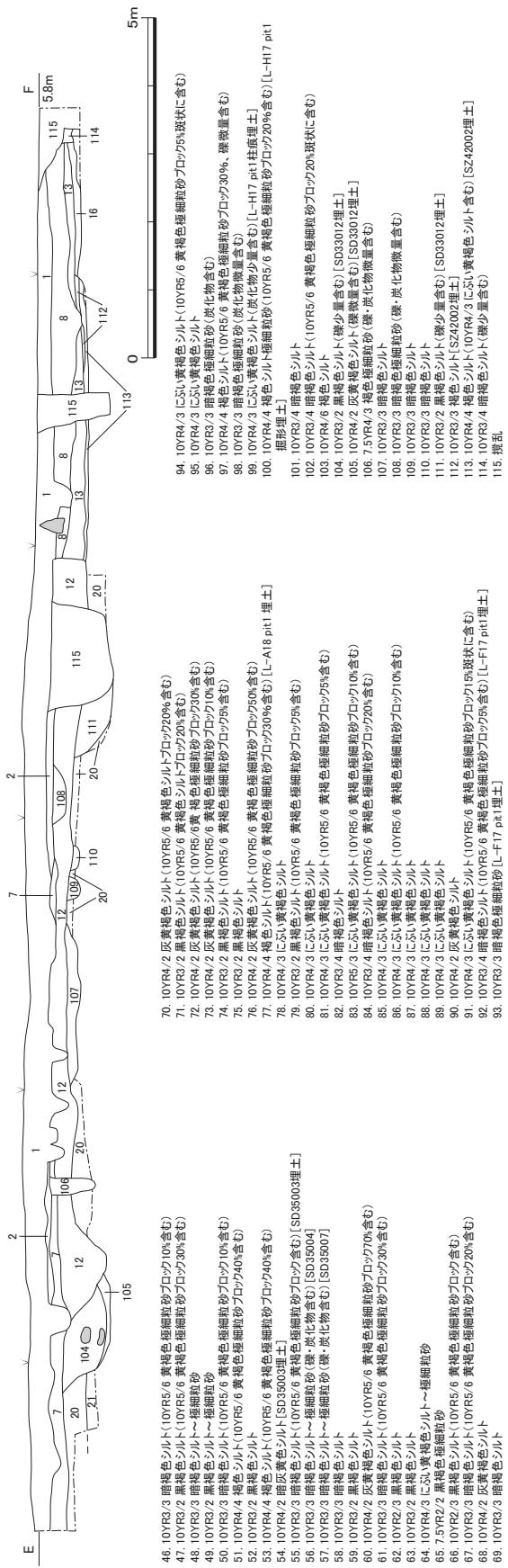
### 第3節 掘立柱建物・柱列

掘立柱建物は 39 棟、柱列は 14 列を確認した。掘立柱建物の桁行と梁行については、柱間の数が多い、柱間の数が同じの場合は距離が長くなるものを桁行

とした。また、棟や柱列の方向については、座標北を基準に、南北方向の遺構は座標北から東あるいは西へ振るということを表すため N○° E、N○° W



第III - 1図 調査区東壁土層断面図1(1:100)



第三 - 2 図 調査区東壁土層断面図 2 (1:100)

とした。東西方向の遺構はN 0° Eのみとした。以下、遺構毎に報告する。

### S B 20011 (第III -18図)

桁行4間、梁行3間の総柱建物である。一部の柱穴は攪乱などにより確認することができなかった。棟方向はN 96° E、東西棟である。桁行は、東西端の柱穴芯々で8.5mであり、各柱間の芯々距離は2.05~2.2mである。また、梁行は、南北端の柱穴芯々で6.4mであり、各柱間の芯々距離は1.85m~2.25mである。

建物を構成する各柱穴の平面形は長軸0.4~0.5m、短軸0.3~0.5mの円形もしくは橢円形を呈する。検出面からの深さは0.1~0.8mである。このうち4箇所で断割を行い、柱痕跡などを確認した。柱痕跡の径は0.15~0.25mである。

柱穴の埋土から土師器甕、13世紀前半の山茶碗、青磁皿、土錐などが出土した。出土遺物の時期については、12世紀後半のものもあり幅がある。

### S B 20030 (第III -19図)

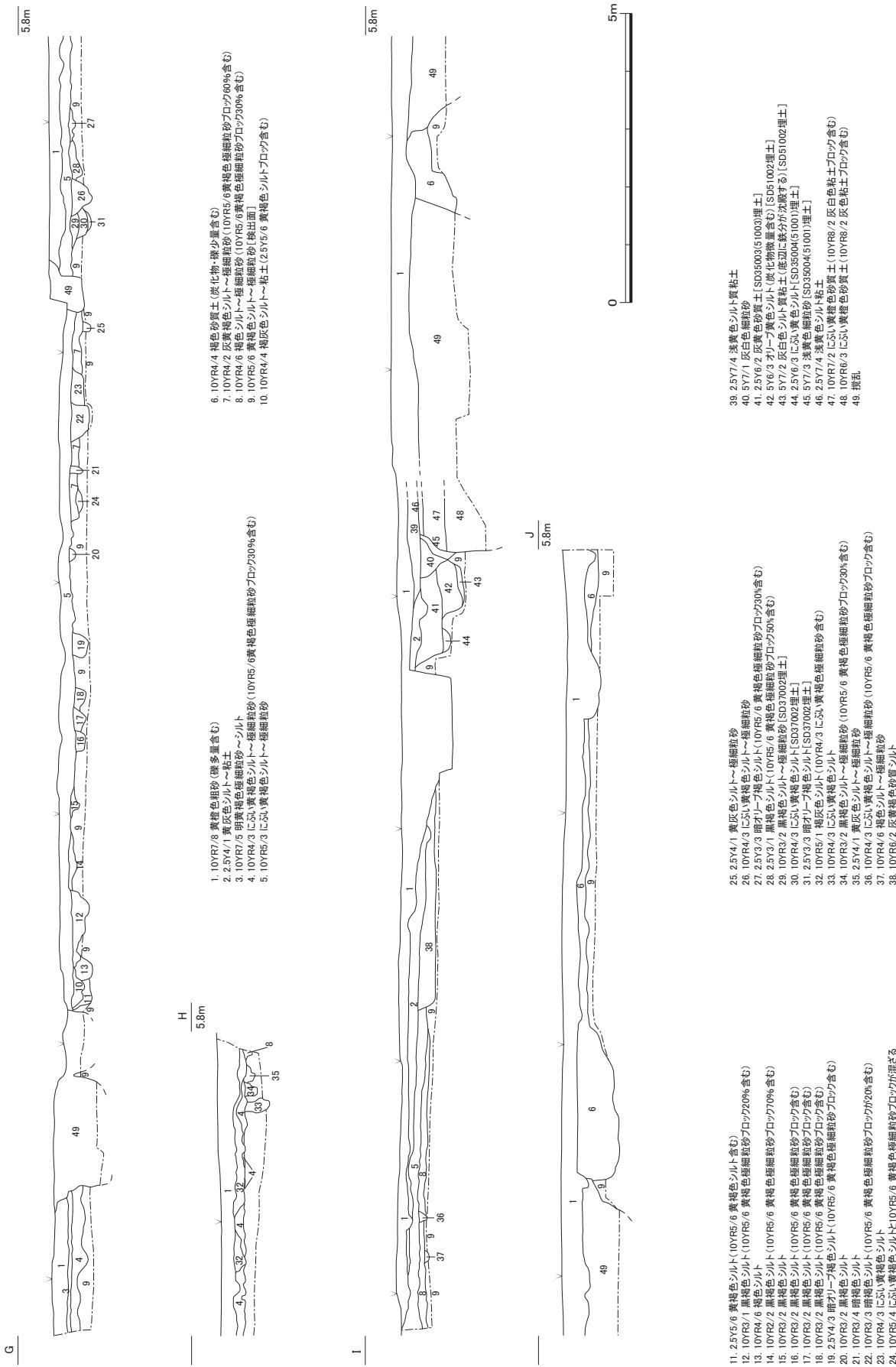
桁行6間、梁行5間の総柱建物である。調査区内に限られるが、規模は最大のものといえよう。一部の柱穴は後世の攪乱などにより確認することができなかった。棟方向はN 99° E、東西棟である。桁行は、東西端の柱穴芯々で12.9mであり、各柱間の芯々距離は2.0~2.2mである。また、梁行は、南北端の柱穴芯々でが10.7mであり、各柱間の芯々距離は2.1~2.2mである。

建物を構成する各柱穴の平面形は円形もしくは橢円形を呈している。規模は長軸0.3~0.5m、短軸0.2~0.7m、検出面からの深さは0.3~0.7mである。柱穴底部37ヶ所のうち28ヶ所で根石を確認した。また、10ヶ所の柱穴で断割を行い、柱痕跡などを確認した。柱痕跡の径は0.1~0.2m程度である。

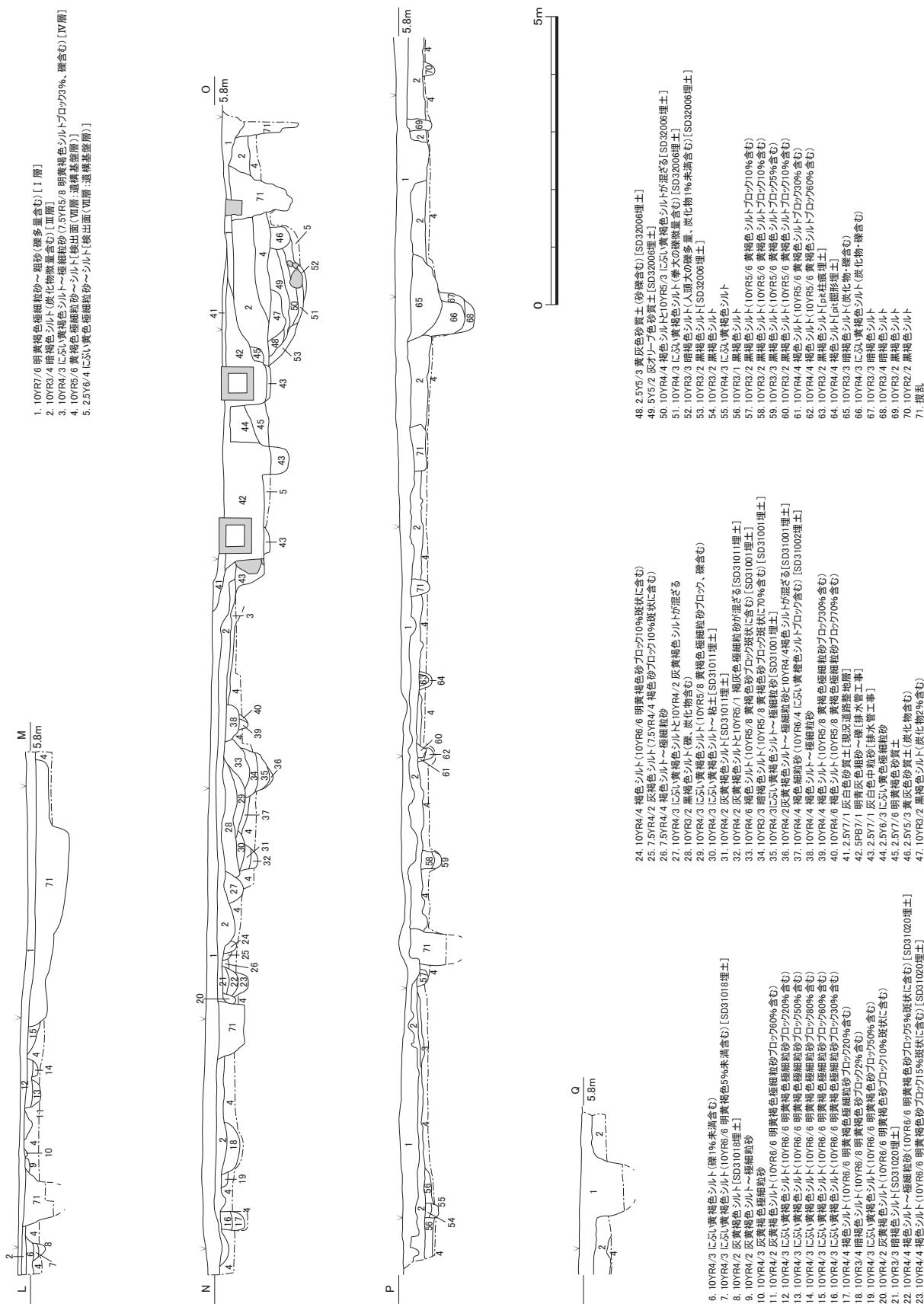
柱穴の埋土から土師器皿、18世紀代の土師器熔炉、山茶碗、鉄製釘などが出土した。出土遺物の時期については、13世紀前半のものもあり幅がある。

### S B 20039 (第III -22図)

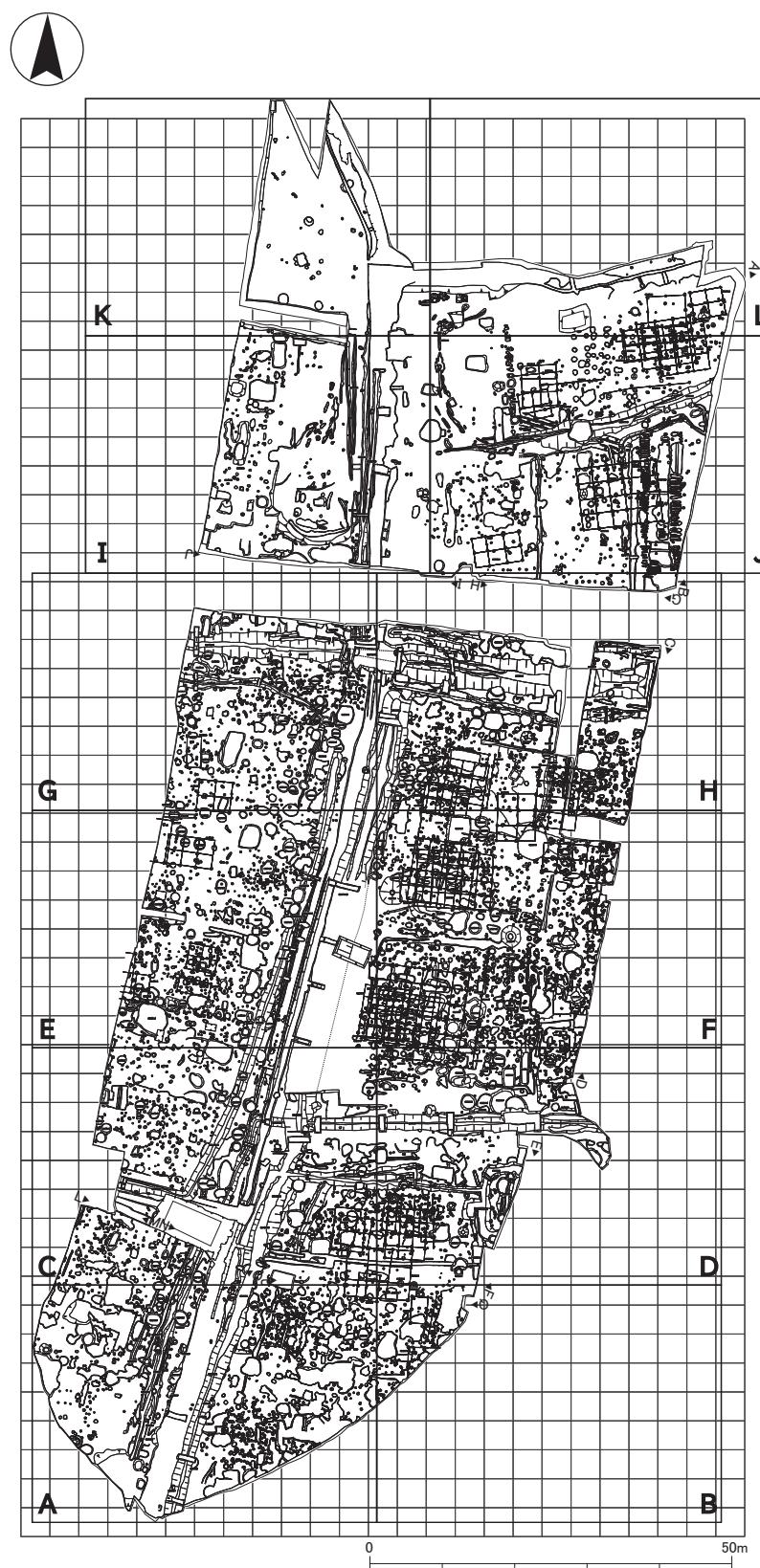
桁行4間、梁行3間の総柱建物である。一部の柱穴は確認できなかった。棟方向はN 6° E、南北棟である。桁行は、南北端の柱穴芯々で7.2mであ



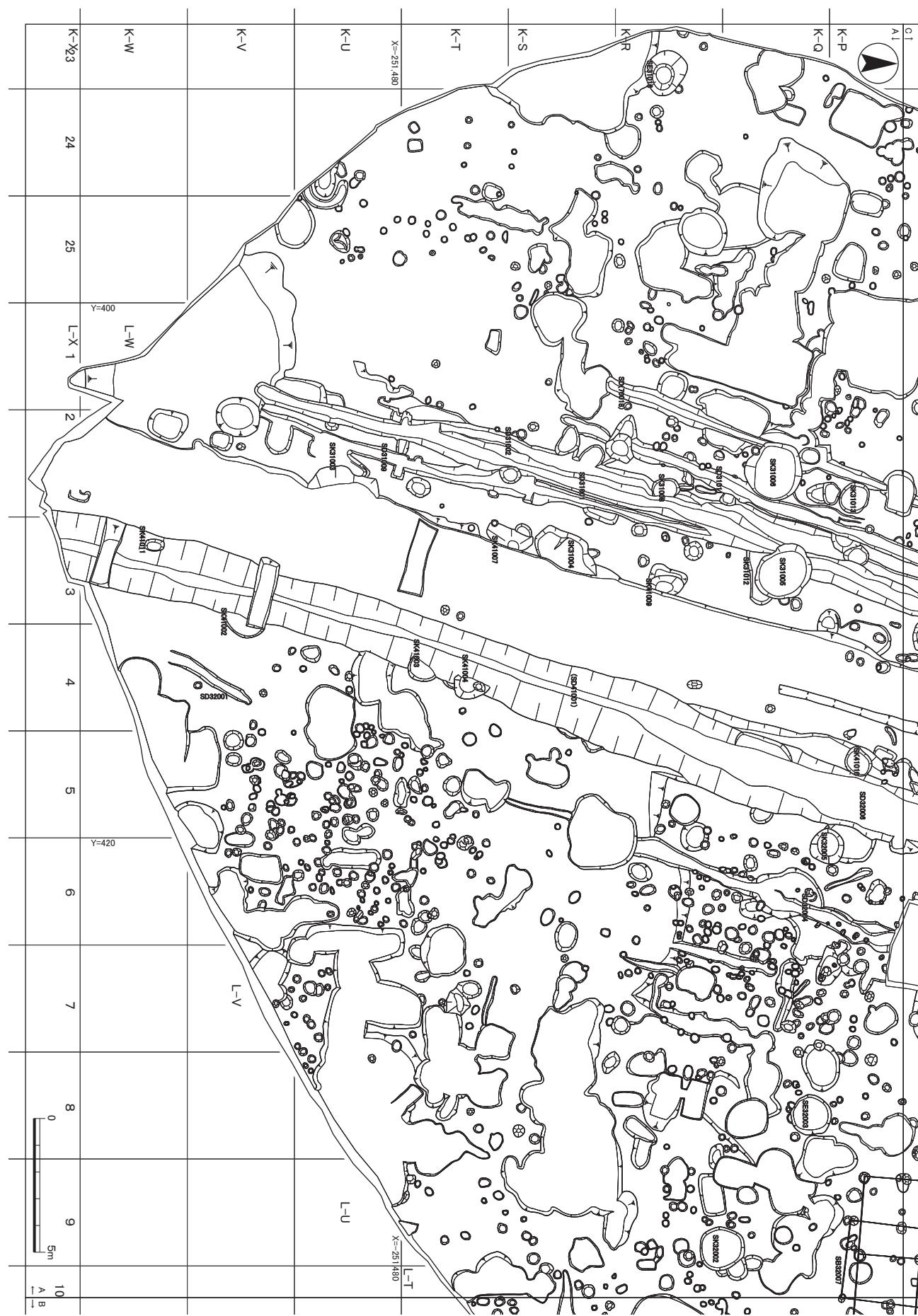
第III - 3図 調査区南壁土層断面図 (1:100)



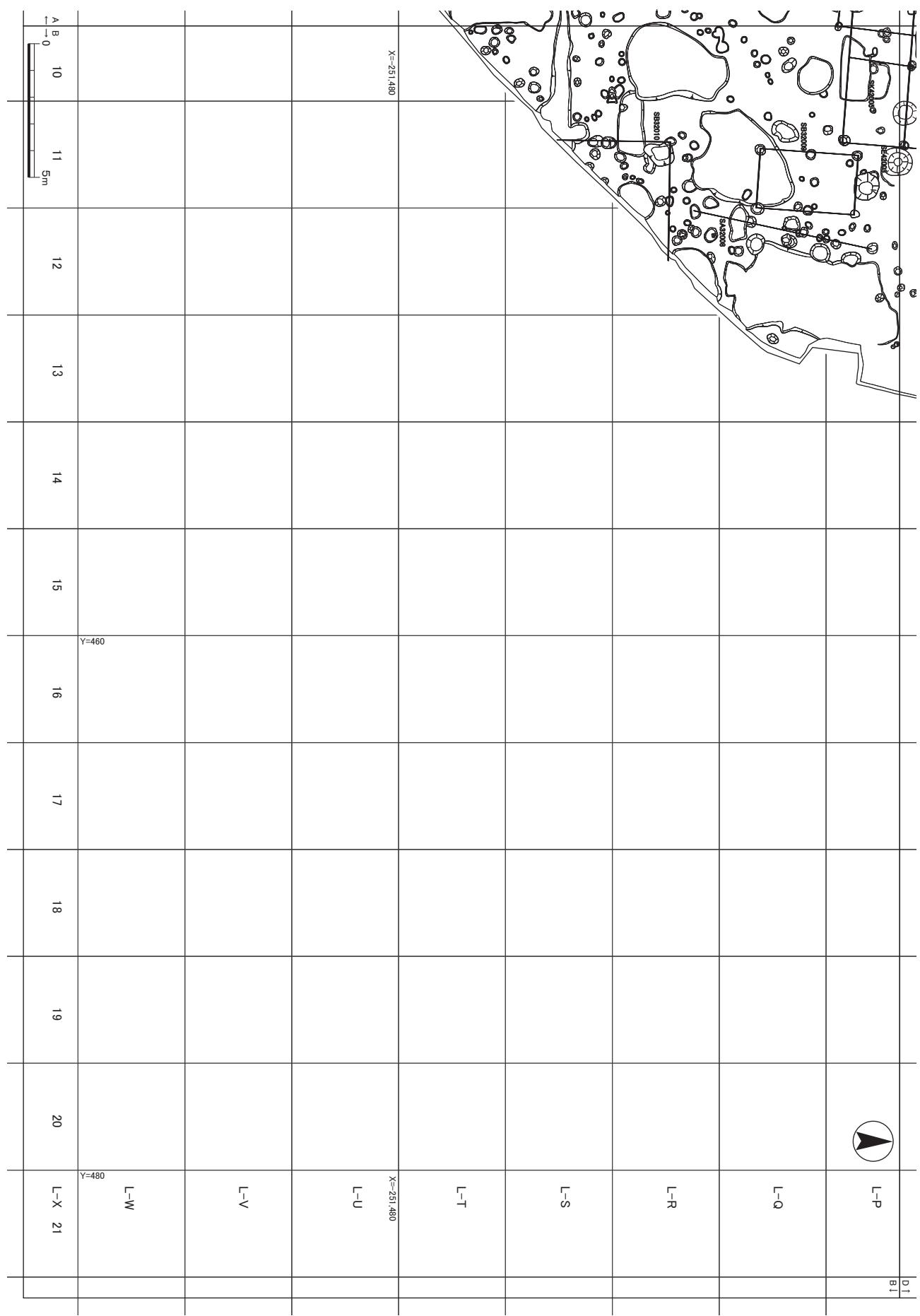
第III-4図 調査区南壁土層断面図 (1:100)



第III-5図 遺構平面図分割状況 (1:1,000)



第三 - 6 図 遺構平面図 A (1:200)



第III-7図 遺構平面図B (1:200)



### 第III-8図 遺構平面図C (1:200)



### 第III-9図 遺構平面図D (1:200)



第III-10図 遺構平面図E (1:200)



第III-11図 遺構平面図F (1:200)



第Ⅲ-12図 遺構平面図G (1:200)